を拂ひ去るには必ず左から右所謂右卷の方向にブラッシュを掛けて擦らなければなりません。此の方向によれば、毛端を表はさしむることが無いのみならず、十分に其塵埃を拂ひ去ることが出來るものである。そこで帽子專用のブラッシュは右卷の方向に擦することが出來るやうに都合よく灣曲せしめて造つてあります。

羅紗即ち毛織物にて作つた帽子にブラッシュを掛けるには、前述の場合の如く左から右即右卷の方向にせねばならんといふことはありません。此場合は、前に述べた起毛せる毛織物の場合と同じ樣に毛の臥して居る方向にブラッシュを掛ければよろしい。

第二。ブラッシュは成る可く柔かに掛くべきこと。多くの人の、ブラッシュにて衣服に附着した塵埃及び泥土を取拂ふのを見るに、中には速に塵埃及び泥土を取り拂はんとする爲めであるか兎角甚だ強く掛くる方が多いやうである。若しも斯く強く掛くるときは塵埃等は漸々糸と糸との間即ち織物の目の、間隙中に押込められ、遂に十分除去することが出來なくなるものである。

加之、織物の目を片寄らせ其の品位を下らしむるに至るものであります。そこでブラッシュは極めて柔かに掛けなければなりません。それでも尙往々織物の目の間隙に多少の塵埃及び泥土を押込むものであるからして、ブラッシュは衣服に附着せる塵埃等が全く除去せらるゝ迄連續して掛くることなく、時々其の裏面を指先にて輕くはじきて塵埃の一部を織物の面より飛散せしめ且つ塵埃の織物の目に押込まるゝことを防がなければなりません。彼の泥土が衣服に附着したときは、一且其の泥土を乾かした上でブラッシュを掛くるものであるが、此場合は特に此點に注意しなければなりません。

それであるからして、ブラッシュは餘り硬い毛で作つたものを用ひてはなりません。尤も餘り柔かき毛で作つたものではこれ亦容易に塵埃を拂ひ落すことが出來ない。そこでブラッシュは十分此點に留意して擇ばなければなりません。硬いのと柔かいのと何れが良いかといふに、寧ろ柔かい方がよろしい。兎に角ブラッシュは金錢を惜まず上等のものを備付けて置くことは衣類の保存上最も大切なことであります。

第三。泥土に對するブラッシュング。雨天の日或は雨後に道路を通るときは、跳ね上げられた泥土が衣服の下部に附着することがあるものだが、此の泥土は前述の如く弱いアルカリの性質を有して居るのみならず水も混じて居るから、其の中には溶液の狀態になつて居るアルカリを含んで居る。そこで泥土は塵埃に比し一層衣服の色に化學的の作用をなすものである。尤もアルカリの作用に依り色合に變化を及ぼさない染料で染めたものであれば、別に其の色の變褪を來すことはないが、多くの場合は多少の變褪を來すことは免れないことである。彼のブラッシュにて十分泥土を拂ひ落した後も尙其附着して居つた部分がおぼろになつて多少其の痕跡を殘して居ることのあるのは、即アルカリの作用により其の部分の色合に變化を來たしたのである。そこで泥土に對しては普通のブラッシュングの外更に一の手入をしなければなりません。

衣服に跳ね附いた泥土は、誰でも最初靜かに十分乾かした上でブラッシュを掛けなどして拂ひ除くものであるが、其の乾かして居る間に泥土中のアルカリが漸々色合に作用を及ぼすものである。殊に炭火に近づけて急に乾かすときは、其作用が一層甚だしいものである。そこで此等の泥土は必ず自然に任せて乾かさなければならんことは勿論であるが、其の乾かす前に一の手入をなすとよろしい。それは、多量の水にて稀釋した極めて〳〵うすい醋酸を清潔な筆先に含ませて泥土の上部より輕く塗つて乾かすのである。さうすると、泥土中のアルカリが醋酸と化合して色合に何等の作用をなさないものに變ずるから、色合に變褪を來すといふことはない。斯樣な手入をして乾かした上で、前述の注意を守り適當なブラッシュングを行へば、完全に泥土を拂ひ去り且つ全く其の跡を殘さないものである。尤も最初につける醋酸が多きに過ぐると其の醋酸の爲めに色合が變化することがある。併し此場合はブラッシュングを行ふた後、多量の水にて稀釋したアンモニア水で輕く其の部分を拭へば元々通りの色合になります。

以上の如き手入をせず唯自然に泥土を乾かしてブラッシュングを行ふたらば、其の泥土の附着して居つた部分を能く調べなければなりません。若し其

の部分丈けの色が他の部分より多少色合が變つて居るとか、又雲がかゝつたやうにおぼろに見ゆる場合は、最後に多量の水にて稀釋した極めてうすい醋酸水で其部分を拭へばよろしい。

第二節　虫干

衣服の虫干といふのは、唯其の名に表はして居る通り虫類を驅除して衣服の虫喰を豫防する目的のみで行ふではなく、その他衣服中に吸收せられて居る濕氣を除去して次の四つの目的を達せんが爲めに行ふのであります。

一、衛生上の害を除くこと。

二、地質の脆弱になることを防ぐこと。

三、色合の變褪することを防ぐこと。

四、虫類のつくことを豫防すること。

元來、衣服の原料となる纖維は、其の木綿たると麻たるとを問はず、絹たると毛たるとの區別なく、何れも多少濕氣を吸收する性質を有して居るものである。纖維に此の性質があるからこそ衣服は自然多少の濕氣を帶びて、衛生上の害、地質の脆弱、色合の變褪を來し、且つ虫類をしてつき易からしむるのである。ところが纖維の種類によつて濕氣を吸收する量に多少がありますから、それ〴〵其性質に應じた虫干をしなければなりません、そこで、私はこれから纖物の種類によつて別々に虫干のやり方と其理由とを述べませう。

一、毛纖物。毛纖物といふものは前にも申し上げました通り、其の間隙に極めて多量の空氣を包有して居るものでありますから、水をはねるところの性質を持つて居るものである。語を換へて申せば毛纖物は水に對して拒反性を有して居るものであります。即ち羅紗であるとかフランネルであるとかいふ毛纖物は少し位な雨に當つたところで、彼の木綿纖物や絹纖物と違つて然程濡れないものであります。この點から觀ると、毛纖物といふものは濕氣を吸收する性質が極めて少ないものであるかのやうに思はれます。併しながら實際は決してさうではありません實は。毛纖物は、木綿纖物は勿論絹纖物よりも一層多量の濕氣を吸收する性質を持つて居るものであります。然るに多くの人は、之を全く誤解して毛纖物は濕氣を吸收する力が極めて乏しいものであると思うて居

らるゝやうであります。この誤解こそ、毛織物の保存に大なる影響を與ふる樣になるものである。もと〳〵此の毛織物の原料たる羊毛といふものは之を濕りたる空氣中に置くだけにても尙其の空氣中から多量の濕氣を吸收するものであつて、最初百匁の純量を有して居つた毛が遂に百二三十目になると云ふ樣に純量に對して二割乃至三割の目方が增すやうになるものである。甚だしきに至つては、空氣中から濕氣を吸收して五割も其の目方が增加することもあります。そこで、狡猾なる商人などは毛を賣り捌く場合に、時としては一夜間位十分濕つて居る空氣中に放置して多量の濕氣を吸收せしむることがあります。斯樣にすれば其毛が濕氣を吸收して目方を增すものであるから、毛の純量に對する三割以上の水分にも毛と同樣の代金を受取ることが出來て、兎に角一時は儲かる樣な譯になります。そこで、生毛或は毛糸などを取引する側に於ては其の中に含有せしむべき濕氣の分量を一定する必要があるので歐洲の羊毛檢査所に於ては、乾燥羊毛、即ち羊毛の純量百分に對し一八、二五分の濕氣を含有せしむることを公許して居るやうな次第であります即ち今茲に十分乾燥して濕氣を

少しも含有して居らぬ羊毛が百匁あるとすれば、之を取引せんとする場合は、之を百十八匁二分五厘と見做し、又現在百四十匁の目方を有する羊毛と雖も實際其の含有して居る所の濕氣の目方を除けば百匁だけある者とすれば、更に之に前述の公許水量一八、二五分を加へ、やはり百十八匁二分五厘と見做のであります、此の羊毛純量に公許水量を加へて得たる量を毛の正量と申して居ります。

以上述べました樣に毛織物といふものは濕氣を甚だ吸收し易いものであるから、空氣中より濕氣を吸收するのみならず、吾々の皮膚面から發散する蒸發氣や汗などを多量に吸收するものである。加之、此の吸收したところの濕氣は容易に發散致しません。ところが多量の濕氣を吸收して居りましても、其外觀及び手觸りなどには甚だしき差異を感じないものである。そこで斯道に精通し且つ多くの經驗を重ねられた人でなければ、單に五官の作用のみにては此の毛織物が濕氣を吸收して居るや否やといふことを鑑定することが出來ません。斯樣な次第であるからして毛織は之を乾かして濕氣を除去することが忘りがちになります。木綿の衣服や又は絹の着物などは、着用後には必ず衣紋竹等に掛

け十分乾かした上で再び着するなり又は簞笥の中に藏めますが、毛織物で作つた衣服は着用後同じく衣紋竹にかけて乾かすことは乾かすが、容易に濕氣を放散しないのと又一方に於ては十分乾いて居るや否やの見分けが十分つかないとで、大抵は適當に乾いて居らないにも拘らず乾いて居ると思つて再び着用することがあるが、小兒などは之か爲めに衞生上思はぬ害を受くることがある。元來毛織物は彈性に富んで居るからして、多少の濕氣を吸收して居つたところで其の氣孔が尙開通して居つて徐々に空氣を流通せしむるものである。この點から云ふと毛織物から成れる衣服は多少濕氣を吸收して居つても木綿の衣服や絹の着物の樣に着心が甚だしく惡くなつて來るものではありません。然しながら其の衣服が濕氣を吸收して居ると其の濕氣が體溫を外界に放散せしむる作用をなすが爲めに體溫は絶えず奪はれ比較的に暖かさを保つことが出來ません。子女に此の毛織物の衣服を着用せしむる場合は、深く此の點に注意しなければなりません。又十分乾いたものと誤認して之を其儘簞笥の中に藏むるときは、其織物に黴を生せしめ又は虫喰の跡を止めしむるやうなことにな

つて、大に織物の品位を下げしむることがあるものです。

以上述べました通りであるからして、毛織物の衣服は着用後は必ず十分に乾かして適宜に濕氣を除去することが、此の織物の保存上極めて必要なことであります。殊に空氣中に於ける濕氣の最も多い梅雨期の後には、其の織物を風通りのよい室内に掛けて乾かすことが必要である。これが所謂土用干しであります。併し夏の日は比較的空氣中に濕氣の多い期節であるから、土用干をしたところで他の織物のやうに其の中に含まれて居る濕氣を十分に除去することが出來ません。そこで此の毛織物の衣服はたとへ土用干をしたからといふて其保存に關し氣を許してはなりません。必ず土用干の外に秋風が吹き渡る九月中旬以後に於ける濕氣の少なくなつた期節に於て、晴天にしてしかも微風のある日を擇び虫干をしなければなりません。而して又一年中で空氣の十分乾燥して居る冬期殊に寒中に、彼の土用干をなすが如く晴天なる日を擇び空氣の流通のよろしき所にかけ置きて、其包有して居る濕氣を十分除去する樣になさなければなりません。語を換へて申せば、毛織物は土用干の外秋干及び寒干を行

ふとよろしいのである。ところが我國の家庭に於ては大抵土用干を行ふけれども、秋干及び寒干をなすことは殆どないと申しても差支ない位であります。こんなことでは毛織物の保存法が其の當を得て居るものとは思はれません。

二、絹織物。絹織物は、毛織物のやうには多くの濕氣を吸收しないものであるが、木綿織物及び麻織物に較べると著しく多く濕氣を吸收する性質を持つて居ります。即ち生糸は之を濕氣多き空氣中に放置するときは濕氣を吸收して約三割位量目を增加することがあります。然し通常の場合は濕氣の爲めに一割乃至一割二分位量目を增加して居るものである。そこで、生糸も亦羊毛と同じく歐洲及び本邦の生糸檢査所に於ては、乾燥生糸の量百分に對し一割一分の濕量を公許して居ります。即ち全く濕氣を含んで居らぬ生糸の量、所謂其の純量が百匁あるとすれば、之に公許濕量の一割一分を加へ百十一匁の正量を有するものと見做して取引さするのである。斯樣に絹織物の纖維は濕氣を多く吸收する方の側であるけれども、毛織物と異なり濕氣を吸收して居るものは其手觸りに依つて之を鑑定することが出來る。そこで少しく注意すれば絹織物中の濕氣を能く除去することが出來るものである。併しながら、絹織物殊に練絹の織物で作つた衣服は濕氣を吸收すると、之れが爲めに纖維內の氣孔が全く塞かれ衣服の內外に於ける換氣作用を全く停止せしむるのみならず、體溫を急に且つ著しく奪ふものである。之れが爲めに高價の絹織物も衣服としての衞生上の價値が甚だしく劣つて來る樣になります。加之、梅雨期の如き蒸熱甚だしき時に濕りたる絹織物を簞笥の中などに永く入れて置くと糸質に多少の變化を與ふるのみならず、白物などは多少黃味かゝつた淡い茶色を表はすやうになつて來るものである。彼の紋付絹羽織の紋の白部は時日の經過と共に漸々茶味を帶ぶるやうになるが、其濕氣を帶びて居る儘永く簞笥の中に藏めて置くときは殊に早く茶がゞつて來るものであります。さうなつて來ると、晴衣として着用すべき目的で切角拵へた絹の衣服も比較的永く其用を辨ぜしむることが出來なくなるものである。

こんな次第であるから、絹織物も土用干及び秋干をなして、衣服中に含んで居る濕氣を適當に除去しなければなりません。尤も絹織物は其の含有して居る濕

氣を全く除去しては多少其の糸質に惡い影響を與ふるものであるから、此種の織物に限り寒干をする必要がありません、唯土用干と秋干だけで十分である。或人は絹織物は秋干だけて宜しいと云つて居るが、餘り感心した說ではありません。梅雨期には少なからぬ濕氣を吸收するものであるのに土用中も引續き其儘にして置く時は、織物は多少蒸熱に逢ふから糸質を害せらるゝことがあるのみならず、色合をして變褪せしむることがある。そこで秋干を行ふ外に梅雨期が明けて土用に入りたる後一度空氣の流通よろしき室內にかけて、所謂虫干をする必要があるものです。そして絹織物の衣服は、毛織物のそれと同じく着用後は必ず衣紋竹に掛けて、所謂風通しを十分になさなければなりません。

三、綿織物と麻織物。木綿纖維も麻纖維も共に、毛よりは勿論絹よりも濕氣を吸收する性質は甚だしく乏しいものであります。且つ又一旦吸收した濕氣を放散することも速かである。殊に麻纖維は甚だしく速かなものである。此點から觀ると此等の織物は其の含有して居る濕氣を除去すること極めて容易で、從て其の保存上の手入も容易である樣に思はるゝであらうけれども、實際はさうではありません。麻織物は兎も角綿織物になると其の織上げ後の仕上の時又其の洗濯を行ふ度毎に澱粉糊をつけるから其の織物には其の表面に常に多量の澱粉糊を有して居る。そこで吸濕性の少ない纖維から出來て居るにも拘らず其の織物は可なり多くの濕氣を吸收するものである。斯く多量の濕氣を吸收した織物が梅雨期に於けるが如き蒸熱に逢ふときは、其澱粉に忽ち一の黴を生ぜしむるに至るものである。この黴は、唯に地質を脆弱ならしむるのみならず、色合をして大に變褪せしむるものである。されば此の織物と等しく常に濕氣を除去して置くことに注意しなければなりません。そこで綿織物も麻織物も、着用後は常に先づ之を衣紋竹に掛けて十分乾かした上で再び着用するなり又簞笥の中に藏めるなりしなければなりません。そして毛織物と等しく土用、秋、及び寒の三回に適宜世に謂ふ虫干をしなければなりません。

それから近來の木綿織物で其色の極めて堅牢なものがある。即ち其の布片を熱湯の中には勿論濃く溶かした石鹼液中に永く煮沸するも、少しも其の色を浸み出さず、又日光に永く直射させても容易に色の變褪を來すことのないものが

あります。此等の多くは、硫化染料といふ一種の染料で染めたものである。此染料で染めたもの殊に其の染め方の不完全なものは、濕潤せる蒸熱に逢ふと、其の染料が多少纖維の上で分解して、硫酸の痕跡を作ることがある。ところが此硫酸は前にも申し上げたやうに木綿をして大に脆弱ならしむるものであるから、其の織物の地質に傷害を受くるやうになるものである。そこで此等の綿織物は常に濕氣を十分除去して置かなければなりません、且つ又永く箪笥の中に藏め置かうとする場合は、たとへ甚だしく汚れてゐないものでも先づ簡單に洗濯をなさるとよろしい。洗濯は普通アルカリ液でするものであるから、硫化染料の分解に依つて纖維上に生じた硫酸を中和して仕舞つて、地質に變化を與ふることがないやうになります。近頃同じ反物で作つたもので、日々着用もし又度々洗濯して居る方のものが地質が丈夫であるにも拘らず、餘り着用もせず唯箪笥の中に入れて置いたものが却て其の地質甚だしく脆弱になつたといふことを往々耳にするが、それは前述の理由に依るのである。このことは實に綿織物の保存上注意すべきことであらうと思ふ。

以上で各織物に於ける虫干の手入方を申しましたから、次に、土用干、秋干、及び寒干の何れに拘らずこの虫干をなすことにつき、一般に注意せざるべからざる、要件を述べて保存法の終りと致しませう。

一、虫干は晴天にして、雲の少なき日を擇びてなすこと。雲多き曇天の日は、天に一點の雲なしといふ日よりも其の空氣中には比較的多くの濕氣を含んで居るから、それ丈け衣服より濕氣を放散することが少なく、必竟同じ勞力を費しても其の効果が少ないことになる。

二、虫干は空氣の流通よろしき場所に於てなすこと。空氣の流通がよろしくない場所は、空氣は殆ど絶えず同一の場所に動かずに居るから、最初は衣服が空氣中に向つて濕氣を放散するが、其の衣服の周圍にある空氣が漸々多く濕氣を含んで來て遂に衣服が空氣中に濕氣を放散することが出來なくなる。然るに、空氣が能く流通すれば、衣服より放散した濕氣を含んだ空氣は他に流動し、衣服の周圍は常に濕氣の少ない新しい空氣に觸るゝことになるから、衣服は比較的多くの濕氣を放散することが出來る。そこで虫干

は能く微風に當てゝ、所謂風通しをするとよろしい。

三、虫干は日光の直射を避くること。日光消毒の目的を以てなす虫干ならばいざ知らず、保存法としての虫干は必ず日光の直射せざる日蔭に於てなさなければなりません。衣服の色は日光に對しては餘り丈夫なものでなく、土用の如き炎天に一日も日光に直射せしめたならば大抵の色は可なり多く變褪するものである。

四、虫干をなしたるものは一旦必ずブラッシュングを行ふこと。虫干を行ふと、空氣中に浮遊して居る塵埃及びバクテリア等が多少衣服に附着するものである。殊に都會の地では甚だしいと思ふ。そこで虫干をなしたものは一旦簡單なるブラッシュングを行ひ然る後簞笥又は其の他の入れ物に藏めるやうにしなければなりません。

五、虫干をなしたるものを藏むるときは必ず適當の防虫劑を其の入れ物の中に入れ置くこと。虫喰を豫防しようとするには單に虫干のみで安心してはなりません。必ず虫の嫌ふ臭を持つて居る藥品を其の入れ物の中又は

衣服の間に挾めて置くとよろしい。此の目的に向て適當して居るものは目下のところで龍腦又は樟腦である。併し、此等のものは漸々揮發して臭がなくなるやうになるから、時々補足してやらなければなりません。尤も極めて虫のつき易い毛革のやうなものに向つては、ナフタリンを紙に包んで其の間に挾んで置くとよろしい。此のナフタリンは臭が餘り良いものでないから、着用する一日位前に其の入れ物より取り出し風通りの良いところに掛けて置くとよろしい。さうするとナフタリンの臭が殆ど無くなるやうになります。

六、衣服の虫干と共に其入れ物の虫干をなすこと。たとへ衣服のみ虫干をなして其の中に含まれて居る濕氣を除去したところで、之れを藏めて置く入れ物が濕氣を含んで居つては、切角の勞も僅かの効果を表はすに止まる譯である。そこで其の入れ物も十分虫干をなさねばなりません。又衣服の虫喰を豫防する爲めに、樟腦水をブラッシュにつけて入れ物の裏表に一面に塗ることもあります。

第三編　衣類洗濯法

第一章　總論

總て着物は御承知の通り何時迄も新しいまゝで居るものでない、身體に着けて居れば段々汚れて來るものである。何故汚れるかと云ふと、第一空氣中には色々の塵埃が飛び散つて居る、夫れから又色々の黴菌も遊んで居るものであるから、夫等の塵埃或は黴菌が着物にくつ着くのである。それ丈でも幾らか着物と云ふものが汚れて來る譯です。其の上吾々の身體からして絶えず排出して居るところの汗とか脂肪とか云ふものが着物に滲み着きます。夫等の脂肪と云ふものは一の粘着性を持つて居るものであるからして、先にくつ着いた塵埃とか黴菌とか云ふものを固く押へて一寸離れないやうに着物にくつ着けて仕舞ふものであります。さうなつて來れば甚しく着物と云ふものは汚れて來る譯であります。汚れた着物を着ては第一に衞生上に宜しくない。そこで着物が汚れたならば、是非共夫れを奇麗にしなければなりません。所謂塵埃や黴菌や

或は又脂肪、垢と云ふやうなものを取去らなければならぬが、夫れを取去るには是非共洗濯に依らなければなりません。勿論貴女方が着物を汚さないやうに着るのか一の洗濯かも知りませぬが、汚れたものはどうしても洗濯を行はなければなりません。して汚れた着物を洗濯すると云ふことは、男子よりは女子の務めだらうと思ふ。ところが洗濯にして一朝其方法を誤つたならば立派な着物も目茶苦茶になつて仕舞ふものです。例へば一の絹織物を洗濯して垢を落すことは宜しいが、爲に其の絹織物の光澤がなくなつたとか、或は大變弱つて來たとか云ふことになつては、少しも洗濯の効がないと同じことになつて仕舞ふものです又洗濯法を知らなければ、夫れを洗濯するには怖い、惡くしたら困ると云ふ考で、兎角洗濯屋に廻して仕舞ふし、夫れから又洗濯のし易い木綿のやうなものでも、自分が洗濯せずに面倒臭いと云つて、女中などに洗濯させます御方も澤山あるものです。ところが女中などは他人であるからして、夫等の着物に對しては愛情が乏しい、そこで兎角粗末にやる傾があります。夫れだから例へ女中に命じて洗濯させても、それを監督しなければなりません。其の監督する人

はどう云ふ風にやつたならば、旨く洗濯が出來るかと云ふことを知らなければならない。さう云ふやうに何れの點から考へても、總ての着物其の他の物を洗濯する方法を貴女方が覺えて置くことが必要だらうと思ひます。そこで出來る丈け細かく洗濯のことは申し上げようと思ひます。洗濯法を分けて、

(一) 乾燥洗滌法
(二) 濕潤洗滌法

の二つにすることが出來ます。これ等の名前は私が勝手につけたものであるから貴女方には目新しく感ぜらるゝでせう。乾燥洗滌法と云ふのはどんな洗滌法であるかと云ふと、之は昔時佛蘭西に於て行はれた一の洗濯法である。ところが其の乾燥洗滌法に依つて洗濯した結果が、甚だ宜しいものであるからして、各國で夫れを眞似し、さうして近頃は我が日本の洗濯屋に於ても、之を行ふやうになつたのです。それは、どう云ふ原理に依て行ふのかといふと、先づ着物が汚されて居る脂肪又は塵埃「バクテリア」などを押へて居るところの脂肪を溶かすのです。其の脂肪を溶かしますると粘着力を有する者がなくなるから、塵埃や「バクチリヤ」と云ふものも容易にすつかり着物から離して仕舞ふことが出來ます。而して其の脂肪を溶かすには、どんなものを用ひますかと云ふと、例へば揮發油と云ふやうな極く揮發し易いもので併も脂肪を溶かす性質を持つて居るものです。即ち揮發油の如きものゝ中に汚れたものを入れ、暫くしてそれから取り出し之を乾せば宜しいのです。さうしたならば揮發し易いものは皆飛んで仕舞ふ、そこで其の着物には塵埃とか「バクテリヤ」と云ふものゝみが一寸く つ着いて居るに止るやうになりませう。そこで夫れをブラッシュで擦すると云ふ樣に、一の簡易なる方法を以て夫れを除けば宜しい。さう云ふ工合に乾して垢とか其の他の汚れて居るものを取るのであるから、乾燥洗滌法と云ふ名前を付けたのであります。

乾燥洗滌法に依て洗濯を致しますと大變便利なことがあります。夫れは第一にどんな色の弱いものでも色の變り易いものでも、此の洗濯法に依れば色を落すとか或は色を變化せしむると云ふやうな心配が少しもありません。第二には、此の方法に依れば、どんな纖維から成て居るものでも、決して夫れが爲に糸質

を弱むると云ふやうな心配は少しもない。第三には此の方法は汚れて居る一部分丈けにも行ふことが出來る、例へは襟の邊りとか袖口の邊りと云ふやうに唯衣類の一部分のみが汚れて居る場合に於て其の着物全體を洗濯せんでも其の汚れて居る部分丈けに限つて洗濯を行ふことが出來る。それから又第四は其の洗濯を行ふ着物を別に片々に致さなくても其儘洗濯することが出來るものです。此四つの利益ある點は乾燥洗滌法の特點とも云ふべき處であります。濕潤洗滌法と云ふのはどう云ふのであるかと云ふと、之は我國で昔から行はれた方法で彼の石鹸とか洗曹達とか云ふやうな「アルカリ」を以て今の脂肪を溶かしてさうして奇麗にする洗滌法を云ふのであります。併し此方法に依ると纖維の種類によりて其の品物を甚しく弱らしたり、又其の物を染めた染料の如何により色を落したりする恐れがあるものである。そこで濕潤洗滌法を行はんとするときは、先づ第一其の織物を作くつて居る纖維の種類を調べ、一方には色の弱いか丈夫かと云ふことを調べなければなりません。若し何の考もなしに直接この種の洗濯を行ふと大なる間違を起すことがあります。例へて見れば

前に申上げた通り「アルカリ」は木綿に對しては害を與へないものであるから、綿布を洗濯する時分は彼の洗曹達で洗濯しても差支ありません樣なものであるけれども其の木綿が「アルカリ」の爲めに落る色で染められて居るならば、決して洗曹達で洗濯することは出來ない樣なものであります。又た絹物を洗濯する場合には洗曹達で洗濯することは出來ない、絹は「アルカリ」には弱いからして如何に其絹が「アルカリ」に丈夫な染料で染められたもの即ち洗曹達が作用しても色の褪めることがないと云ふ場合でも、糸の性質を害さるゝから強い「アルカリ」を用ひることは出來ません。其の點に於てはこの濕潤洗滌法は大變面倒である。併しながら其の手續に於ては、乾燥洗滌法から見ると稍々簡單である。而も極く僅かの費用で洗濯することが出來るものであります。唯簡單に、安く洗濯することが出來るのは、濕潤洗滌法の特點と云ふべきものです。

次に乾燥洗滌法の手續を御話し申します。

第二章　乾燥洗滌法

第一節　乾燥洗滌法の藥品

乾燥洗滌法の藥品には色々ありますが、

揮發油、
ベンヂン、
ペトリユーム、ベンヂン、
タルペンタイン、
エーテル、
クロヽホルム、
四鹽化炭素、
硫化炭素、

此の八つが重なるものであります。此の中の「ベンヂン」と云ふものは一名「ベンゾール」とも云ひまして、彼の石炭を乾餾する時分に一番先きに蒸餾せらる部分

です。だから石炭から出て居る油の中で一番輕いものであります。さうして稍良い香を持つて居る。彼の揮發油などは厭な香がありますが、此の「ベンヂン」の香は可なり良い香を持つて居ります。さうして其の性質は大變揮發し易いものでありまして、それを空氣中に打つちやつて置くと滓を殘さず揮發して仕舞ふものです。例へば茶碗のやうなものに「ベンヂン」を入れて空氣中に捨てヽ置くと、皆それが飛んで、空になつて茶碗の中に何も殘つて居ないやうになります。「ベンヂン」と云ふものはさう云ふ風な油でありますが、一方に於ては吾々の身體から出る所の脂肪或は又彼の植物の油及び脂肪等を能く溶かす力を持つて居ります。さう云ふ風に大變揮發し易くつて少しも滓を殘さず揮發して仕舞ふし又脂肪を溶す性質を持つて居るから、乾燥洗滌法に於て最も良い藥品として用ゐられて居ります。外國に於ては此の目的に向つては揮發油よりも「ベンヂン」が多く用ゐられて居ります。併し從來我が日本の洗濯屋に於て「ベンヂン」を用ひなかつたのは、大變價が高かつたからです。近頃東京の錦町にある瓦斯會社で「ベンヂン」を安く賣出しました。夫れだから我日本で殊に東京に於て

は「ベンヂン」は近い中に盛に用ひらるゝやうになるだらうと私は思つて居ります。又貴女方も此「ベンヂン」を用ひて洗濯をやつた方が揮發油を用ふるより餘程結果が宜しい。

「ペトリユームベンヂン」。彼石油から取る所の油で一名「ベンゾーリン」とも云ひます。是も能く油或は脂肪を溶かす所の性質を持て居るし、又極く揮發し易いものであります。併し是には大變善し惡しがありまして惡いものを用ひますと後に丁度揮發油で洗つたやうな厭やな臭ひが殘ります。そこで「ベンゾーリン」を用ひんとする場合は成る可く攝氏の六十度から百十度位迄の間に沸騰する所の「ベンゾーリン」と云ふて、求めるが宜しい。此六十度から百十度の溫度に於て沸騰するものならば乾燥洗滌法に用ひて少しも差支ありません。此の油は直段が安うございます。

「エーテル」。「クロヽホルム」。四鹽化炭素。硫化炭素。是等のものは皆前と同じく大變揮發するところのもので、さうして能く油、脂肪を溶かすものである。併しながら「クロヽホルム」と云ふものは、一の麻睡劑でありまして醫師が外科の手術をやる時分に患者に嗅がすものでありますから、家庭の洗濯に用ひるのは危險であります。又四鹽化炭素は一番乾燥洗滌法に宜いもので「ベンヂン」などより、もつと宜しいけれども、之は直段が非常に高いものです。外國に於てさへ餘程高いものですから、日本などで買つたら餘程高いでせう。だから斯う云ふものでは家庭用としては適しません。硫化炭素も餘程脂肪や油を溶かす性質を持て居るけれども、之は後とに大變厭やな臭を殘しますから、之も貴女方には御勸め申しません。貴女方が御遣りになるとすれば「ベンヂン」か或は「ペトリユームベンヂン」を御用ひになれば宜しい。今其の遣り方を御話し申しませう。

第二節　乾燥洗滌法の手續

乾燥洗滌法を行ふには先づ汚れて居るところを能く調べて、其處をブラッシュの樣なもので擦り、能く塵埃などを取り去らなければなりません。次に「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」を磁製のものか、さもなくば金屬製の容器に入れ、其中に前のブラッシュで塵埃を落した品物を入れ十五分間位其の中に浸して置くのです其の間は出來る丈け嚴密に蓋をして置かなければなりません。そ

こで十五分間も經つたならば、それから上げ、能く搾つて空氣中で夫れを乾かし、最後に能く、はたけば宜しいさうすると大抵の汚れが落ちるのであります。併しまだ十分落ちなかつたならば、もう一度新しい「ベンヂン」を取つて前と同じことを行ふのです。さうするを大抵の汚れは十分落ちて仕舞ひます。併しながら極々甚しく汚れて居て、それでも尙取れない時は、もう一度新しい「ベンヂン」で同じ仕事を行はなければなりません。さうすると、どんな汚れでも十分洗ひ去られて、奇麗にすることが出來ます。若しも家庭に於て夫等の洗濯を時々やるとすれば洗濯する器物を二つ或は三つ置いて、第一の器物第二の器物第三の器物と定めて置くがよろしい。さうして、其の各々の器物に「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」を入れて置いて、最初ブラッシュで塵埃を落した布を第一の器物の中に入れ、蓋をして十五分間其儘に置き、夫れから搾つて空氣中で乾かした上で、これをはたき、夫れで汚れが取れなかつたならば、第二の器物に入れて前の如くする、夫れでも落ちなかつたら第三の器物に入れて再び前の如くすると云ふ樣にして、此等の油を何回も用ふるのです。さうすれば經濟に而かも便利に

洗濯することが出來ます。尤も家庭に於てやる場合はさう汚れたものを洗濯するのは却て其當を得ないから僅か汚れた場合に行はなければなりません。そこで二つの洗濯器を置けば十分です。「ベンヂンの液は唯一度洗濯したからと云つて投げて仕舞はずに、これを瓶の樣なものに移し能く栓をなして洗濯した殘りのものを保存して置かなければなりません。さうして幾度も洗濯を繰返し色々の洗濯を行つて、第一の器物の「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」が非常に汚れたならば、これを他の容器に移し、其の第一の器物に新しき「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」を入れ第二回目或は第三回目に洗濯するときの用に供し、且つ第二の器物は其儘第一回目の洗濯を行ふ用に供すれば宜しい。さう云ふ風に非常に汚れた油はこれを他の容器に移して新しきものに代へ此の他の容器に移されたる汚れた油は之を纏めて置いて後で適當な方法により奇麗なものにして、再び用ふる樣になさなければなりません。

以上は着物の全體を洗濯する方法でありますが、これから汚れたる一部分の洗濯、たとへば襟とか袖とか、と云ふ樣に只着物の一部を洗濯する場合を申しませ

う。此の場合は決して「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」の液の中に着物の全體を浸す必要がありません。筆或は刷毛に「ベンジン」或は「ペトリユームベンヂン」を付け之を汚れた所に塗りて、夫れを一旦乾かしそれから齒を磨く楊子のやうなもので、輕く夫れを擦すれば宜しい。夫れで垢がまだ十分落ちなかつたならば、又前の通りにすると云ふやうに此の方法を何遍も繰返すのです。さうすれば十分其の部分を奇麗にすることが出來ます。

さて全體を洗濯した場合も亦部分洗濯を行つた場合も、今の「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」を作用したものは、夫れを成るべく暖室に掛けて、乾かすことが必要であります。染物屋や洗濯屋になれば、大抵一の暖室を特別に作つて置くものですが、家庭に於ては特別にさう云ふものはないから、成るべく暖い所に掛けて置く樣に心掛けて戴きたい。これは洗滌藥の臭を取り去る爲めであります。即ち洗滌液で洗ふたものを暖室に掛けてをけば「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」が揮發して臭味が少しもなくなるものであります。貴女方が「ベンヂン」などを得るに困つた場合には、揮發油で洗滌せらるゝことがありますが

此の場合は暖室に掛けて置いても揮發油の臭ひをすつかり拔くことは出來ぬものでこれには貴女方も困つて居らるゝことだらうと思ひます。此の場合には土瓶に湯をたぎらかして其の土瓶の口から出づる湯氣の上に、今の臭ひの取れないものを置いて、さうして引延しながら其の全體を湯氣に當てゝやれば宜しい、さうすると揮發油は其の水蒸氣の溫度に依つて、或は又其の水蒸氣が上に發散すると一緒に夫れに連れて、揮發して仕舞ひますから、全く其の臭ひと云ふものを止めないやうにすることが出來るのです。さう云ふ風な工合にして嗅ひを取り去れば、揮發油で稍可なりな洗濯が出來ます。

以上の樣に乾燥洗滌法によりて洗濯を行へば、大抵の汚れは之を取り去ることが出來るけれども果物の汁の爲めに出來た汚點とか或は汗の爲に着いた汚點とか云ふ一般の汚點は洗滌法に依て取り去ることが出來ぬものです。そこでそれらの汚點の跡は依然として殘つて居ります。それ等の汚點があつたならば特に適當な汚點拔法に依つて之を拔くので、このことは後に申し上げます。

これで一般の乾燥洗滌法に就て述べましたから其の次に述べんとすることは

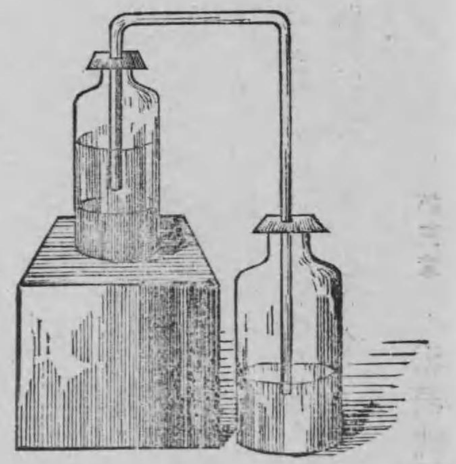
「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」の使用後の汚れたものゝ處分法であります。これは、二三回使用して汚れたからといつて捨つるには及ばぬもので、前に一寸申し置いた樣に之を空壜の樣なものに入れて置いて、暇次第に直して新しいものにすれば、再三使用することが出來るものであります。其の方法は左まで面倒なものでなく、家庭に於ても十分行ひ得らるゝものです。斯樣にして洗滌液を經濟に使用することは最も必要なことであります。次に其の直し方を申し上げませう。

第三節　舊き洗滌藥の回復法

ベンヂンでも、ペトリユームベンヂンでも其中に汚れたものを何回も入れて洗ひますと、此等の油は非常に黑くなつて來ます。それは重に着物にくつ着いて居る所の塵埃だとか其の他色々不潔な不溶解物が液の中に這入つて居るから非常に汚れて見えるだけで、比較的脂肪は澤山溶けて居ないものであります。それだから何か一つの器械的の方法で夫等の塵埃等を取つて仕舞へば、其洗濯液が再び又奇麗になります。夫れを取るにはどうするかと云ふと、唯濾し分くればよろしい。即ち漏斗の底に脱脂綿を入れ、之を第九圖の樣に、成るべく口の細い空壜の樣なものに挿し込み、其の漏斗の内に汚れた「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」を入れ、さうして漏斗を何かで蓋をして置くのです。さうすると「ベンヂン」が綿を通つて下に在る壜の中に滴りますが其の綿を通る場合に塵埃などは皆綿にくつ着いて仕舞つて、下に濾過されました「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」が甚だ奇麗なものになります。この奇麗なものになつたものは、再び前の樣に洗濯に用ふることが出來ます。さう云ふ風に汚れた洗濯液は、綿で濾しさへすれば何遍も用ふることが出來るものであるが、餘り何回も用ひた者は終に脂肪が其中に澤山溶けて居つて、洗濯に用ひても脂肪を溶かすことが出來ない者になつて仕舞ふものです。所謂此「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」が脂肪を以て飽和されて仕舞ふものであります。さうなつて仕舞へば、綿で濾しても駄

第九圖

目ですが、されば と云つて夫れを捨てるのはまだ惜いものです。其の場合に藥屋から「トワドル」四度の苛性曹達を買つて來て、脂肪が飽和して居る「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」の中に加へなさい、尤も其の苛性曹達の分量は今の脂肪を以て飽和して居る「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」の四分の一の目方丈け用ふれば宜しい。さうして能く攪拌し、且つ嚴密に蓋をなして、暫く其儘にして置くのです。さうすると云ふと遂に其の液が二つに分れて、上と下と二層を爲す樣になります。其の下になつて居るものは何であるかと云ふと、之は今の「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」の中に溶けてあつた脂肪が苛性曹達と化合して、一の石鹼になり、其石鹼が最初苛性曹達が溶けた水に溶けて下の方に沈んだもので、つまり一の石鹼液であります。又上の方は奇麗な「ベンヂン或は「ペトリユームベンヂン」である。さう云ふ風に二層に分れたならば上の方の層になる奇麗な「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」を外の器に移せば宜しい。夫れを移す場合に、靜に注意して移すか、又完全に移してやらうと思へば「サイフオン」の裝置で移せば宜しい。「サイフオン」の裝置と云ふのはどう云ふのかと云



第十圖

へば、先づ硝子の管でも何でも宜しいから子供が用ふる玩具の水揚のやうに、即ち一方を長く他方を短く折り曲げた管を作るのです。さうして其の管に水を充たし長い方の口を指先で押へて短い方を「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」中に入れるのですさうして短い方の口が石鹼液の少し上のところへ止る位になして押へて居る指を取れば宜しい。さうすれば最初は水が長き方の口から流れ落ちますが遂ひには「ベンヂン」か「ペトリユームベンヂン」が絶えず流れ落ちる譯になるのです。それを他の器物に取れば「ベンヂン」或は「ペトリユームベンヂン」のみを分ち取ることが出來ます。さう云ふ風にした「ベンヂン」を再び前の如く洗濯に用ふれば、店から新

しく買つて來たものと同じことです。さう云ふ風にしてやれば、極く經濟に洗濯を行ふことが出來ます。併しながらこの乾燥洗濯法は如何に安く上げやうとしても、兎に角之れに用ふる洗濯劑は澤山の容量が必要です。例へば着物壹反を洗濯するに八升からの「ベンヂン」か「ペトリユームベンヂン」が必要ですが其の直段は如何に安いと云つても初めは一時に壹圓内外は買はなければなりません。夫れだから中々家庭に於て夫れだけの經費を投じてやると云ふことは餘り適當したものだとは申されません。そこで此の乾燥洗濯法は全體を洗濯する方に用ひませんで、部分洗濯に應用すれば宜しい。詰り或る特別なる場合の外は着物の一部分の汚れて居る所を洗濯する場合にのみ此の法を行ひ其の全體の洗濯は是から述べる濕潤洗滌法に依つて行へば宜しい。さうしてやれば大變旨く洗濯が出來るのみならず、又比較的安く上ぐることが出來ます。次に濕潤洗滌法を申しませう。

第三章　濕潤洗滌法

第一節　洗濯用の石鹸

濕潤洗濯法といふのは前にも申し上げた通り一のアルカリで脂肪を溶かして奇麗にする方法であります。アルカリは脂肪を溶解する性質を持つて居りますから垢に之を作用するときは脂肪は全く溶解せられて其の粘着性を失ふやうになります。斯くの如くして脂肪が全く溶解せられて仕舞つたならば、塵埃及バクテリア等の固形物は單に衣服に附着して居るやうになつて容易に取り去らるゝやうになるものであります。此のアルカリが脂肪を溶解する力を有して居ると云ふことは、婦人方が頭髪を結びて手が油じみたときに石鹸又は洗曹達の溶液或は灰汁等で洗ふと十分其の油氣を除き去ることが出來ることに依つても了解せらるゝでせう。而して其の脂肪を溶解する性を有するところのアルカリに屬するものには、洗曹達即ち炭酸曹達或は苛性曹達の溶液石鹸の溶液アンモニア水、硼砂の溶液等澤山ありますが就中衣類の洗濯に適するアルカリ劑としては石鹸の溶液であります。何故に石鹸の溶液は此の目的に向て適當して居るかと云ふに之に對しては次に述ぶる三つの重なる理由がありま

す。

第一、石鹼は甚だ弱きアルカリ劑であること。アルカリ性の強いものは強いもの程脂肪を溶解する力を多く有して居るからして、アルカリ性の強いものを用ふるときは十分脂肪を溶解することが出來ますが、其のアルカリが尙地質にも作用し又色合にも作用するものである。そこで絹とか毛とか云ふ動物性纖維から成れる織物のやうにアルカリの爲めに其の糸質を傷害せらるゝもの或はアルカリの爲めに其の色合に變脫を來すものなどには此のアルカリの強いものを作用することが出來ません。彼の木綿とか麻とか云ふ植物性纖維から成れる織物は、別にアルカリの爲に其の糸質が傷めらるゝことがないからして如何に強いアルカリを用ひても差支のないやうなものであるけれども、其の色合の變化に甚だしい影響を與ふることがあります。斯樣な次第であるからして洗濯する場合は、成る可く弱いアルカリを用ひ、其の衣類の地質には勿論色合にも何等の影響を與へずに汚れを取去るやうになさらなければなりません。それでこそ洗濯の眞の目的を達することが出來ます。

此の目的に向ては苛性曹達は、勿論強きに過ぎるし、炭酸曹達も亦稍強過ぎる傾がある。又硼砂は之に反して餘り弱きに失し地質及び色合に影響を與ふることが少ないが脂肪を溶解する力に乏しいものです。然るに石鹼はアルカリ劑として苛性曹達又は炭酸曹達の如く強きに過ぎず、硼砂等の如く弱きに失せず、洗濯に最も適當して居るだけのアルカリ度を持つて居るものであります。之石鹼は、其の性質上からして洗濯劑として最も適當したものであると云ふ所以であります。

第二、石鹼は必要に應じてアルカリを供給するものであること。石鹼は脂肪に水酸化ナトリウム即ち苛性曹達を作用して作つた者で脂肪酸と名づくる一の酸類とナトリウムと云ふアルカリ金屬との化合より成れるものであります。斯樣に石鹼は一の鹽類であるけれども、之を水に溶かせばアルカリ性の液を得らるゝのです。石鹼を水に溶かすときは水が石鹼の一部分を分解して脂肪酸とナトリウムとになし、此のナトリウムが更に水に作用してアルカリ性の苛性曹達となるからであります。そこで石鹼は水に溶けて居つて

こそ始めてアルカリ性となつて洗濯の効を奏するものであると云はなければなりません。併しながら石鹸を水に溶かせば、一方に於て其の一小部分が脂肪酸と苛性曹達とに分解するが、又他方に於て其の分解せられた脂肪酸と苛性曹達とが互に化合して再び石鹸を作らんとする傾きがあるものであります。そこで石鹸を水に溶かせば化合と分解との二つの正反對なる力が互に競爭するやうな有樣になるものです。ところが、此の分解の力は化合の力よりも極めて少ないものであるから、石鹸を水に溶かせば其のほんの一小部分のみ分解するだけであります。たとへば百匁の石鹸を水に溶かせば僅かに二匁位よりか分解せぬものである。斯樣な譯であるから石鹸の溶液が呈するアルカリの度は極めて微々たるものです。之が即ち前述第一の理由に於て石鹸は弱いアルカリ劑であると云た譯であります。今此の石鹸の溶液中に浸して洗濯するときは、石鹸の分解に依つて生じたアルカリが衣服に粘着せる脂肪に作用して之を溶解し、及び脂肪酸は其の洗濯の効を完からしむる方に向て働く(この脂肪酸の効用は後に詳しく述べます)からして、最初の分

解に依りて生じたアルカリと脂肪酸とがそれ丈少くなつて來ます。是に於て前に申した分解の力と化合の力とが釣り合はぬやう、即ち平均を保たぬやうになつて來ます。そこで石鹸は再び分解して分解の力と化合の力とが平均するやうになるまでアルカリと脂肪酸とを遊離せしめます。從て前と同じ力で洗濯作用を營むやうになります。若しも終に洗濯が完全に營まれ最早アルカリの必要がなくなれば石鹸の分解は止むものです。斯樣に石鹸は必要に應じてアルカリを供給するもので、恰もアルカリの倉庫のやうなものであります。こんな次第であるからして石鹸液を以て洗濯するときは始めより終まで常に同一のアルカリ度を有する液中で洗濯が出來る。ところが苛性曹達といふ樣な純粹なアルカリを用ひたならば、其全部が一時に擧つて作用するから、糸質を弱らしめ或は色を變褪せしむるのみならず、洗濯の始めこそ垢を能く落すか其終りには殆と垢を落さぬやうになると云ふ風に洗濯の始終に於て其の効力が違つて來るものであります。この點からしても亦石鹸は洗濯劑として最も適當なものであると云ふことが出來ます。

第三、石鹼の溶液は強き粘着力を有すること。石鹼の溶液は強き粘着力を有するので、其の液中に固形物の浮遊せるものあるときは之を吸收團結せしむるものであります。今一器に盛つた水中に白堊を加ふるときは、其の細小なる粒が急速なる運動をなし容易に沈降するものではないが、若し此の中に石鹼の溶液を滴加し能く攪拌したる上放置するときは、直ちに白堊は皆團結して沈降し以て清澄なる液となるものです　是即ち以上の理由に依るのであります。石鹼の溶液は此くの如き性質を有して居るからして、此の液中にて衣類を洗濯するときは一度石鹼の分解に依つて生じたアルカリに作用せられた垢は此の粘着力を有して居る石鹼水の爲めに吸收團結せらるゝものであるから、此等の垢をして容易に衣服から離脱せしむることが出來る。他のアルカリ劑は脂肪を溶かす力はあるけれども、固形物を吸收團結せしむる力は殆どないものです。是亦石鹼の洗濯劑として最も適當したものであると云ふ所以の一つであります。

石鹼は、洗濯劑として以上述べたるが如き特性を有して居るものであるが、如何なる石鹼でも皆衣服の洗濯用として適當して居るものであると云ふことは出來ません。石鹼の製造法及び其の原料の如何に依つて適不適があるものです。元來石鹼といふものは脂肪の液中に苛性曹達を添加し長時間煮沸して作るものであるから、其の脂肪と苛性曹達とを石鹼を作るに要するだけの適當量を用ひ適當の操作をなす時は、脂肪の成分たる脂肪酸と苛性曹達の成分たるナトリウムとが共に過不足なく丁度よい鹽梅に化合して石鹼を作るものであります。ところが、其の分量を極めて正確に定むることが出來なかつたが爲に、或は其の製造法の不完全なるが爲に、往々遊離の苛性曹達を含める石鹼又は遊離の脂肪を含める石鹼が出來るものです。即ち脂肪の割合に苛性曹達を多量に用ふるときは前者の石鹼、之れに反して脂肪の割合に苛性曹達の分量が少なかつたならば後者の石鹼が出來るものであります。吾々が日々用ふる化粧用の石鹼中でも、之にて顔を洗ふた後にピリ〳〵と皮膚を刺戟するものもあるが之は即ち遊離の苛性曹達を含める石鹼で其の苛性曹達が皮膚を刺戟するのである。又洗ふた後にヌルヌルして洗ひ切れない樣な心持を與ふるものもあるが、之は即

ち遊離脂肪を含む石鹸で、其の脂肪が皮膚上に止まるからであります。此くの如く遊離の脂肪或は遊離のアルカリを含める石鹸は洗濯劑としては餘り適當したものではありません。遊離のアルカリを含める石鹸は其の少し位の存在は別に意に介せんでもよいが、稍多く含めるものになると其の溶液が強いアルカリ性を帶ぶるものでありますから之にて洗濯するときは、第一色合を變化し又脱色せしむる憂があるものです。又木綿麻等に於ては別に其の地質の傷めらるゝことがありまして、せんけれども、絹又は織物に於ては、幾分か其の地質が傷めらるゝ樣な傾きがあります。而して其の色の變脱せらるゝ度合及び地質の傷害せらるゝ度合は、石鹸に含める遊離アルカリの多少、及び其の石鹸液の溫度の高低に依つて異なるものであります。又遊離の脂肪を含める石鹸の溶液にて洗濯するときは前者のやうには其の色合及び地質に格別の變化を與へなければども、其の織物の手觸り及び光澤等物理的性質に影響を與ふるものである。絹織物に於ては殊に著しき變化を受くるものであります。即ち絹織物を多量の遊離脂肪を含める石鹸を溶かした液中で洗濯するときは、其の手觸りが甚だしく惡しくなるのみならず光澤もなくなり又鳴り(鳴りといふのは絹織物を握るときにキユツと鳴るのをいふのです)もなくなつて、絹の絹として尊重せらるゝ特有の物理的性質を殆ど失ひ、絹と思はれぬやうなものになるものです。其の他の織物に於ては絹のやうに甚だしくはないが皆多少其の影響を受くるものであります。

以上述べました點から考ふるときは、洗濯に用ふる石鹸は十分之を撰擇して遊離のアルカリも又遊離の脂肪も含まない上等のものを使用するやうになさらなければなりません。さうでなければ、到底洗濯の眞の目的を達することが出來ません。ところが今、多くの人の洗濯するのを見るに以上の如き考からして其の用ふる石鹸を擇ばない。つまり其の品物の良し惡しに係らず代價の安い洗濯石鹸と名付くるやうなものを用ひて居るやうです。此くの如きは一方から云ふと一寸經濟なやうであるが、これこそ諺に云ふ一文惜みの百知らずでせう。其くせ御自分の化粧用に供するものは吟味に吟味を重ねこれも惡いあれもいかんと云ふて一箇五拾錢だとか一圓だとか云ふ極めて高價な石鹸を擇ん

で居るのは私には實に了解することが出來ません。このやうに身體が大切なら何せ其の身體を守る衣服の洗濯に用ふる石鹸を吟味せんのでせうか。實に其の權衡が取れぬことゝ存じます。殊に現今の市場に於て洗濯劑として少しの缺點もなく極めて良好な洗鹸でさへ、百二十匁に付内地製のものは十錢内外舶來のものにて二十錢内外ではありませんか。

こんな次第であるからして、私は世の人が大に洗濯用の石鹸の撰擇に就いて十分留意して貰ひたいものであると始終思つて居ります。そこで、次に如何にせば洗濯に向つて適當なる石鹸であるや否やを鑑定することが出來るかといふことを御話し申しませう。

第一に遊離脂肪の見定めですが、これは雨水でも蒸餾水でも何れにても宜しいが、其の熱したものゝ中に、試驗せんとする石鹸を少し溶かして見るのです。其の溶液が稍冷却しても別に白く濁らずに透明になつて溶けて居れば、夫れが遊離脂肪の無いものです。若しも此の場合に透明にならずに白く濁つて居れば、遊離脂肪があるのです。そして其の濁る度は遊離脂肪の多少に比例するもの

です。尤も其の水が雨水か或は蒸餾水でなく、石灰分を含んで居る井水とか河水を使ふたら駄目です。何せなれば、其の石鹸に、たとへ遊離脂肪がなくとも、それ等の石灰分が石鹸と化合して同じ白いものが出來て、其の液が濁るからです。そこで、この試驗には蒸餾水か雨水を用ゐなければなりません。此の試驗に依つて遊離脂肪の存在を認めたならば、洗濯用殊に絹織物の洗濯に用ひない方がよろしい。尤も以上の試驗に於て其濁り方が極めて僅かであるもの、即ち遊離脂肪の存在が至つて少なき石鹸ならば強ち之を排斥するには及びません。

それから遊離「アルカリ」の見定め方ですが、それはどうするかと云ふと、「フエノール、フタリン」の「アルコール」溶液を石鹸に滴らして見るのです。先づ其の石鹸を小刀のやうなもので削つて、新しい面をこしらへ、其の上に今の「フエノール、フタリン」の「アルコール」溶液を一滴着くるのです。此の場合に、若しも赤色を呈するものならば、遊離「アルカリ」のある證據であります。其の赤色が濃くなる程多くの遊離「アルカリ」を含んで居るのです。此の試驗に於て、極めて淡き桃色を呈するくらゐのものならば兎に角、赤色を呈するものは洗濯に用ひない方がよろし

い。市販の洗濯石鹸には此の遊離「アルカリ」を多量に含めるものが多いから御注意なさらなければなりません。

以上申上げた通りであるから、洗濯をする場合には前述の二試驗に依つて少し上等な石鹸を擇んで貰ひたい。若し此等の試驗がやれないならば「マルセール」石鹸と名づくるものを用ひなさい。「マルセール」石鹸と云つても其種類は澤山ありますが、中でも「ガレール」石鹸が一番良いだらうと思ひます。それは私が良いと認めたのみならず、近頃農商務省に於て色々、絹練用の石鹸を取調べた其の時にも「ガレール」石鹸が第一に撰まれました。此の「ガレール」石鹸は、遊離の「アルカリ」も脂肪もない良い石鹸であるからして、洗濯に用ひても色や地質を弱らす恐れが少しもありません。併し「ガレール」石鹸は通例の洗濯石鹸などを賣て居る所にはありませぬが、染料を賣つて居る所に御出になれば、大抵あります。百貳拾匁の代價は凡拾八錢位です。

これで石鹸と云ふものは、濕潤洗滌に適當した藥品である理由もお分りになつたらうし、又た石鹸中に含まるゝ遊離「アルカリ」或は遊離脂肪を檢定する方法も

御了解になつたでせう。又た遊離脂肪や遊離「アルカリ」を含んで居ない石鹸は洗濯に最も適當したものであると云ふことも悟られたであらうと思ひます。

そこで次には石鹸と云ふものは、どんな工合に作用するから、洗濯の目的を達することが出來るものであるかと云ふことを御話し致しませう。言を換へていへば洗濯上に及ぼす石鹸の作用を御話し申しませう。

石鹸はこれを水に溶かしますと、前に申し上げました通り其の一部分が「アルカリ」と脂肪液との二つに分れますが、此の二つのものは洗濯に對しては別々に異なつた作用をなすものであります。「アルカリ」は如何なる作用をなすかと云ふに、之れは垢の方に作用をなすのです。即ち此の「アルカリ」が垢の成分たる脂肪と化合して石鹸となり水に溶けて仕舞ふやうになります。此くの如く塵埃又は「バクテリヤ」等を固着せしめて居る脂肪を溶かして仕舞ひますから、垢は容易に取り去らるゝ樣になるのであります。又脂肪酸はどう云ふ作用をなすかと云ふに、之れは一つの異なつた作用をなすものです。即ち一は物理的の作用で仝「アルカリ」の爲めに脂肪が取り去られた部分の衣服面に作用して、これを滑澤

ならしめ以て手觸りを良好になし、且つ失ふた光澤の一部を恢復するのです。彼の洗濯曹達の溶液だけで洗濯すると多少其の衣服の手觸りが硬くなるものだが、良好な石鹸で洗濯すると其の手觸りの比較的柔かであるのは實に此の脂肪酸の作用です。脂肪酸の作用の他の一は化學的作用で、餘分の「アルカリ」を中和するのです。石鹸中の「アルカリ」が垢に作用しても、尙餘分の「アルカリ」が其の布に作用するものです。それがために往々地質を弱くする恐れがあるものであります。然るに石鹸の分解に依りて離れた脂肪酸が、其の餘分の「アルカリ」に作用して、之を中和して仕舞ふものです。そこで後に地質が弱るやうな恐れがありません。たとへ「アルカリ」の爲めに傷害せられ易い毛織物でも絹織物でも、之に用ふる石鹸さへ良好なものであるならば、其の地質を弱らす恐れはありません。彼の吾々が洗濯曹達などで頭髮を洗ふと、其液が頭の皮膚を刺戟するものであるが、良好な石鹸にて洗ふときはそんなことのないのは全く脂肪酸の此の作用であります。

石鹸は前に申し上げた如く其の水溶液の狀態に於てこそ洗濯の作用をなすものであるから、石鹸にて洗濯をせんとする場合は、先づ石鹸を湯に溶かして完全なる溶液を作り、此の中に衣服を浸して洗濯しなければなりません。然るに世の人の洗濯をするのを見るに、多くは其汚れたる部分に直接石鹸を擦り付けて揉むやうである。斯くては石鹸が分解して「アルカリ」と脂肪酸とを生ずることが少ないから比較的石鹸の損失を來たし、多量の石鹸を要する割合に汚れが落ちないものです。此點に向つては十分注意して貰ひたいものである。

石鹸のことは此の位にしまして、今度は水のことに就て話しませう。

第二節　洗濯用の水

洗濯する水はどんな水でも宜しいかと云ふと、さうは參りません。例へば井水のやうなもので洗濯しては、十分な洗濯が出來ないのみならず、それが爲に却て織物の手觸りや光澤を非常に害することがあります。井水といふものは、土地から湧き出て來るのであるから、所謂地層を經過して來るものであるから、其の間に石灰鹽類などを多少溶かして來るものです。そこで井水の中には石灰は可なり澤山含まれて居る筈です。ところが石灰分が含まれて居る水に石鹸を

溶しますと、水に溶けない石灰石鹼と云ふものが出來る、さうして其の物が洗濯する所の布にくつ着いて、後で幾ら洗つても取去ることが出來ないものになつて仕舞ふものです。そこで非常に其の織物の手觸りを惡くし、且つ又光澤をなくする樣になるのです。「カルシユーム」石鹼といふものは、以上の如き害を與ふるのみならず、又布に着いて居る垢の上にも被つて、其の垢を益々布にくつ着けて仕舞ふものであります。さういふ風になつたならば、幾ら後で立派な洗濯をやつても、決して垢を取ることは出來なくなつて仕舞ひます。唯此の點から考へても、井水と云ふものは洗濯の用水としては不適當なものであると云はなければなりません。其の他に井水の洗濯に不適當な譯が、もう一つあります。夫れは大變石鹼に損を來すことです。何せかといふと水の中の石灰が石鹼と化合して、石灰石鹼となつたならば、夫れは最早洗濯の効用は少しもなさないものでありますから、それ丈け石鹼が損になる譯であるからです。以上述べました二つの理由からして、井水は洗濯に不適當なものであると云ふのです。世の中の人が硬い水で洗濯をすると石鹼が割合にきかないのみならず良い洗濯が出

來ないなどゝ申しますが、それはこのことを云つて居るのであります。然らば洗濯に向つてはどう云ふ水が宜いかと云ふと、最も良い水殊に絹織物などを洗濯する場合に適當した水は雨水であります。即ち雨の降る日に外に盥でも出して雨を集めました水、或は又瓦屋根とか又亞鉛張の屋根から傳はつて落ちた雨を集めましたところの水が、一番宜しいものです。何せ雨水が一番宜しいかといふと、雨水といふものは、天然の蒸餾水で純粹な水であるからです。即ち雨と云ふものは、貴女方が御存知のやうに、熱のために地上の水が蒸發して、さうして水蒸氣になつて空氣中に昇り、其の後寒冷な空氣の爲めに冷却せられて、水となつて地上に降り來るものであるから、天然の蒸餾水であつて、井水のやうに「カルシユーム」などは少しも含んで居りません。そこで洗濯に用ひても井水のやうに種々の障害がないものです。尤も此の雨水には多少「アンモニア」及び炭酸瓦斯のやうな瓦斯を含んで居りますが、此等のものは洗濯に對して何等の影響をも與へません。つまり石鹼の良いものを擇んで、雨水を用ひて洗濯をすれば、織物の手觸りが惡くなるとか、光澤を失ふとか、或は又垢が落ちないやうになる

と云ふ心配は、少しもないものであります。さう云ふことを申しますれば、天氣の好い日には雨水が得られないから、洗濯が出來なくなるではないかと云はるゝ御方もありませう。夫れは御尤もで御座いますが、さういふ風に雨水が得られなかつたならば、或は又雨水を集むることが面倒であるならば、即ち次の樣になした水を用ふれば宜しい。

井水でも或は流れ水でも又は水道の水でも、何でも構いませんから、先づ一旦夫れを沸騰させしむるのです。それから沸騰して居る水の中に其の一升に對して炭酸曹達(洗曹達)を五分目の割合に入れて、尙暫時沸騰を續くれば宜しい。さうすると、そこに糟が出來ますから、其の糟を取り除いて奇麗にした所の水を取つて、洗濯に用ひれば宜しいのであります。何せさうすれば宜いかと云ふことを一寸申して置きませう。

水の中に石灰分は、どう云ふ風になつて溶けて居るかといふと、貴女方も御存じの通り、二つの有樣になつて溶けて居るものです。即ち一つは「カルシユーム」と炭酸といふ一の酸とが化合して生ずる炭酸石灰に、尙餘分の炭酸が化合して重

炭酸石灰即ち酸性炭酸石灰といふものになつて居ります。もと〳〵炭酸石灰といふものは、水に溶けないものだけれども、若しも之に餘分の炭酸が作用すれば互に化合して水に溶け易い重炭酸「カルシユーム」と云ふものになつて、詰り「カルシユーム」が水の中に溶けて居る樣になります。こんな有樣になつて詰り「カルシユーム」が溶けて居る水であるならば、其の水を單に沸騰さすれば、餘分に化合して居る炭酸が瓦斯體となつて飛んで、前の重炭酸石灰が元の炭酸石灰になつて仕舞ひます。然るに炭酸石灰と云ふものは、前に申上げた通り水に溶けないものであるから、遂に糟となつて沸騰せる水の上に浮んで來る樣になります。そこで其の糟を取て仕舞へば、重炭酸石灰の形になつて溶けて居たところの「カルシユーム」丈けは、其水より取り除くことが出來ます。併しながら水の中には唯重炭酸石灰となつて「カルシユーム」が溶けて居るばかりではない「カルシユーム」は硫酸と化合し硫酸石灰となつて、重炭酸石灰と共に溶けて居ることが多いものであります。此くの如く「カルシユーム」が硫酸石灰となつて水の中に溶けて居る場合は、幾ら其の水を沸騰させても、決して「カルシユーム」が糟になつて水

から離れると云ふことはないものです。そこで先づ其の水を一旦沸騰させて重炭酸石灰となつて居る「カルシユーム」を糟となし、それから其の中に炭酸曹達を入れてやれば、硫酸石灰の形になつて居る「カルシユーム」を沈澱せしむることが出來ます。即ちさうすると、硫酸と曹達とが化合して硫酸曹達と云ふ水に溶くるものになつて、殘りの石灰と酸と曹達とが化合して炭酸石灰となつて仕舞ひます。ところが炭酸石灰は水に溶炭酸とが化合して炭酸石灰となつて分れて來ます。そこで其の糟を取り去りさけないものであるから糟になつて仕舞ひます。ところが炭酸石灰は水に溶へすれば、其の水の中の石灰は殆と取り去ることが出來ます。此くの如くして「カルシユーム」を取り去ることが出來るが、夫れが爲めに新に出來た硫酸曹達はどうするかと云ふと、之は幾ら水に溶けて居ても、洗濯に害を及ぼすものでないから搆ひません。こんな次第であるから、井水のやうな「カルシユーム」の溶けて居る水を洗濯用に使ふ場合は、先づ其の水を一旦沸騰させて、それから炭酸曹達の少量を加へ、依て出來るところの糟を取り去つて仕舞へば宜しいのです。これで水の中に溶けて居る石灰分を取り去るだけのことは御了解になつたでせうから、序に水の中に石灰分があるか無いかと云ふことを見分る方法を申しませう。

水の中に石灰分が溶けて居るや否やを試驗する方法は、試驗せんとする水を試驗管のやうなものに取り、之に極めて少量の「アンモニア」水を注ぎ、尙其の中に一旦雨水の如き純粹な水に蓚酸「アンモニユーム」と云ふ藥を溶かした液を注きて、二三十分間も其儘にして置いて見るのです。若しも其の水が白く濁つたならば「カルシユーム」のある證據ですが、若しも濁らずに居れば「カルシユーム」の少しもない證據です。又其の濁り方の多い少いに依て「カルシユーム」の多少を知ることが出來ます。若し蓚酸「アンモニユーム」と云ふ藥がなければ、前に申した「ガレール」石鹼を少し、其の水に溶して見れば宜しい。若しこれが爲めに其の水が濁つたなら「カルシユーム」があるのです。水のことは此位にして置て、次には愈濕潤洗滌法の手續を申しませう。

第三節　濕潤洗滌法の手續

石鹼を以て洗滌をしようと思へば、第一織物の種類に依て區別を立てなければ

なりません。例へば動物性纖維から成て居る絹と、植物性纖維から成て居る木綿とは、同じ方法で洗濯することは出來ない、多少の加減をしなければならぬものであります。そこで便宜のために、絹織物と、毛織物と、木綿織物との洗濯を、別々に分けて御話し申しませう。

第一項　絹織物の洗濯

絹織物の洗濯と云ふものは、外の織物の洗濯に較べて見ると、其やり方は雜作のないもので、比較的容易に垢を落すことが出來るものであります。併しながら此の織物は時に依ると傷み易いものであるし、又手觸りを惡くし且つ光澤をなくし易いものである。夫れだから絹織物の洗濯をする場合は、成るべく地質を痛めないやうに、又手觸りを惡くなさない樣に、且つ又光澤をなくなせぬやうに、十分注意を加へてやらなければなりません。これは中々困難なことであるが、此の注意を缺きては到底眞の洗濯は出來ません。

絹織物を洗濯しようと思へば、第一汚點が、あるか、ないかを調べなければなりません。若しも汚點があつたならば、其の汚點がどうして出來たのであるかと云

ふ其の原因に就て能く調べて見て、それ相應の手段を以て先づ其の汚點を取り去らなければなりません(汚點を取ることは後に申します)。其の汚點を取り去つた後で、石鹼を以て洗濯を行ふのです。普通洗濯して居るのを見るに、其用ふる石鹼の目方などに少しも頓着せんで、いゝ加減に溶かしてやつて居るが、それは甚だ其の當を得ないものであります。石鹼は常に大凡の分量を定めて使用しなければなりません。尤も甚しく汚れて居るとか、僅しか汚れて居らぬとか云ふ其汚れ加減に依て、多少の加減をなさなければなりませんけれども、一般から申しますと絹織物百目に對して石鹼が六匁から九匁まで取れば丁度適當であります。夫れ丈けの石鹼を計り取りて、之を洗濯するに十分な容積だけの水に溶かしたものを洗濯液として用ふれば宜しい。尤も石鹼は最初少量の熱湯で溶かして置いて、適當量の水を盛つた盥の中に入れてやつても宜しい。斯樣にして作つた石鹼液の中に、洗濯しようとする絹織物を入れて、最初は先づ能く振るのです。それから汚れた部分を見出して、其の部分を掌の上に置き、一方の手には石鹼液を付けて、兩手の掌で輕く打つのです。或は極く柔い「ブラッシュ」

か又は海綿に石鹸液を付けて輕く摩擦しても宜しい。甚だしく汚れた部分の垢は、順次こんな風にして取り去り、以て洗濯を行はなければなりません。然るに、大抵の人は普通洗濯と同じく其の汚れた部を揉む樣ですが、これは甚だ宜しくないことであります。何せ揉むのが惡いかと云ふと、第一糸に毛端を出さしめ、第二には織物の組織の平均を失はしむるからです。例へば、織物が綾織になつて居れば糸が一方に片寄りまして、見掛が大に惡くなるのみならず、其の着物が大變破れ易くなつて來るものであります。それだから、成るべく丈け絹織物は之を揉まないやうにして洗濯することが緊要です。それから其の洗濯液の溫度は、どの位が宜しいかと云ふと、それは汚れ加減に依て違ひます。極く僅か汚れて居るものならば冷液を用ひても宜しいが、併し、甚しく汚れて居る場合は其沸騰液を用ひなければなりません。沸騰液を用ひて洗濯をする場合には、迚も其の液中に手を入るゝことが出來ませぬから、其の時は時々其の布を外に出し、前の如く汚れた部分を兩手で叩いて垢を落すやうにしなければなりません。併し、普通は攝氏の四十度位の溫度が絹織物の洗濯に最も適當して居ります。

さういふ風にして總ての汚れを落したならば洗濯液から出して、彼の絹練りの時に申しましたやうに水洗すればよろしい。即ち最初先づ布の目方百匁に對して二三匁の割合に洗曹達を入れて溶かした熱湯で洗ひ、再び同じく洗曹達を入れた湯で洗ふと云ふやうに、熱湯で二三回洗つて十分其の石鹸を落し、それから段々と溫度の低い湯で洗つて、最後に十分冷水で洗ふのです。それを直に冷水で洗つたならば、其の絹織物は光澤もなければ手觸りも惡く却て洗濯して直打を下げる樣になりますから、是非共洗ひ方は今云ふ方法に依らなければなりません。さういふ風にして完全に洗つたものは、夫れを乾す前に一旦澤山の水に僅かの醋酸を入れて酢い位にしたものゝ中に通した上で、それを搾つて乾せば宜しい。此くの如く醋酸の薄い液に通しますれば第一絹の手觸りを能くし、さうして鳴りを出させるのみならず、第二に光澤を出させるものです。それだけの効があるから、一番仕舞には醋酸の淡い液に通すのが大切であります。以上申し上げました樣にして洗濯を致しますれば、絹織物が大變立派に洗濯が出來るものです。併しながら此の方法に依て、色が甚しく落ちる場合がありま

す。斯かる場合は、此の法に依りて洗濯することが出來ません。そこで石鹸を以て絹織物の洗濯をしようとする場合には、最初着物の隠れて居る一部分即ち縫込の所を取つて、それ丈けに就て洗濯を行つて試驗することが必要です。此の試驗に於て甚だしく色が落ちるやうであつたならば、夫れは貴女方が洗濯を行はないで洗濯屋に遣られた方が宜しい。併し僅か落ちる位ならば、石鹸液を薄くし且つ其の溫度を低くして洗濯を行へば宜しい。例へば友仙染の縮緬の如きものは、この濕潤洗滌法でやれない、どうしても乾燥洗滌法でやる外はありません。そこで、この濕潤洗滌法に依りて洗濯する場合は、必ず其一部分丈け取て、試驗してやることを忘れてはなりません。尤も後で色上げをやる爲に洗濯を行ふものならば、色が落ちた所で差支ないから、直樣洗濯して構ひません。洗濯した絹織物は、其後にそれ〴〵適當の仕上をなさなければなりませんが、其の仕上は、後に仕上法の編のところで述べますから、此處には略して置きます。

第二項　毛織物の洗濯

毛織物の洗濯ですが、之は洗濯の中で最も六ヶ敷ものです。何せ六ヶ敷かと云ふと、毛織物は非常に縮み易いのと又糸と糸とが互に密着し易いからであります。若し織物が縮んで糸と糸とが密着致しますれば、織物の目は少しもなくなつて仕舞ふものである。さういふことになるから六ヶ敷といふのみでなく、其の他に又一の理由があります。元來毛といふものは、前にも申した通り「アルカリ」に對しては極めて弱いものである、それであるから動もすれば、織物を非常に弱らすことがあるものです。之れも亦毛織物の洗濯が六ヶ敷といふ譯であります。然らば、どういふ風にしたら、其の織物を左程縮ませぬやうに、且つ糸と糸と密着せしめぬ樣に、又糸を弱らせぬやうに、洗濯が出來るかといふ毛織物の洗濯法を、次に申し上げませう。

毛織物の洗濯をする時分には、之に用ふるところの石鹸の分量は、織物の目方よりは洗濯する水の目方に依て定めた方が安全であります。其の分量はどの位であるかと云ふと、水一升に對して石鹸が二匁五分、即ち石鹸の目方は丁度水の目方の千分の五位になる樣にするのです。以上の割合にて作つた石鹸液の中に少し臭がする位に、少量の「アンモニア」水を入れて洗濯液とするのですが、此の

「アンモニア」水を用ふるのは、毛織物洗濯の秘訣です。さういふ割合に作りました洗濯液を攝氏の四十度位になし、其の中に一旦能く塵埃などをブラッシュで取つた所の毛織物を入れ、絹織物の洗濯をなすときのやうに能くそれを振るのです。それから其の織物の端の方から、順々調べて汚れて居る部分を見出し、汚れて居る部分は之を極く輕く揉めばよろしい。尤も此の場合は、出來得る丈け輕く揉まなければなりません。且つ揉んだならば、其の揉んだ部分を直ぐ延して置くことが極めて必要なことで、このことは毛織物の洗濯に於て決して忘れてならんことです。他の汚れた部分も亦同樣の手續で洗ふのです。斯樣にして汚れた全體の部分の垢を落さなければなりません。併しながら毛織物を洗濯する場合は、一回で汚れた部分を全く落して仕舞ふといふ考は除いて仕舞つて、第一回目に於ては唯稍落さうと云ふ考でやらなければなりません。以上の如くして全體の垢を稍落しましたところで、其の織物を其儘洗濯液の中に一時間か一時間半位漬けて置くのです。次に其第一回の液から取り出し、再び新しき洗濯液を用ひて第二回目の洗濯を行ふのです。即ち水一升に石鹼一匁三分

「アンモニア」少量の割合で新しい洗濯液を拵へ、其の第一回の洗濯を行つたものを其の中に浸して、第一回に行つたような方法で、汚れを落して、一時間許り其の液中に漬けて置けば宜しい。此くの如く二回の洗濯を行ふと、大抵の汚れは落ちるものであります。それでも十分落ちないからといふて、無理なことをやつてはいけません。必ずもう一度洗濯液を新しく代へて、前と同じやうにしなければなりません。さう云ふ工合に、一時に汚れを落さずに、段々と落すといふ考へでやらなければ立派な洗濯と云ふものは出來ないものであります。それを兎角一度か二度で全く垢を取り去る積りで嚴しく洗濯するからして、洗濯した爲に却て甚しく品物の直打を下らしむることがあるものです。故に其の邊に氣を付け、成るべく氣長くして洗濯しなければなりません。第二回目以下の洗濯液を作る割合は皆第二回目と同じ割合にして、別に之より淡くする必要はありません。つまり此の洗濯を行ふ場合には、毎回極めて輕く揉み且つ其の部分を能く延ばして其の液中に一時間半位宛浸漬して置きさへすれば良いのであります。さう云ふ風にして十分汚れを落しましたならば、最初熱湯にて洗つて

石鹼を落し、それから十分水で洗ふのです。次に最後に一旦絹の場合と同じく、少許の醋酸を入れて少し酸い位にしたところの水に通し、能く水を振り切つて乾かせば、それで洗濯が終へたのです。

この毛織物を濕潤洗滌法に依つて洗濯するときは、絹の場合と同じく色の剝げることがあるから、矢張其の一部分を取つて最初試驗を行ふことが必要であります。それから此の織物は前に申し上げた如く、石鹼液で洗濯すると甚だ縮み易く且つ糸と糸とが密着し易いものであるが、其洗濯液の溫度が高ければ高い程、又洗濯液に加へた石鹼の分量が多ければ多い程、及び其の洗濯液の中で揉めば揉むほど、縮んで密着し易きものであります。そこで此の織物を洗濯する場合は、其の洗濯液の溫度を成るべく低くし、又石鹼の量も成るべく少なく用ひて成るべく輕く揉むことが必要であります。且つ又其揉んだ後は必其の部分を引き延ばして置くことも、亦極めて必要なことであります。それから又それを乾かす場合は、能くそれを引張つて乾かすやうになさらなければなりません。例へば、毛の布であつたならば、先づ其の兩端を縫ひ合せ、其の中に物干竹を挾みて高きところに掛け、又其の下部の方に更に一本の竹を挾み、其の竹の兩端に石のやうな重りを附け、能く引張るやうな工合にして乾かせばよろしい。しかも其の乾かし方は出來得る丈速かに乾かすことが必要であります。容易に乾きませんと、毛織物は工合が少し惡くなつて來るものである。然しながら日光が直射しては、それが爲に色の剝げる恐れがありますから、成るべく日蔭になつて居て、風の能く通るところで、出來得る限り早く乾かすことが必要であります。斯樣に致せば毛織物の洗濯も十分立派に出來るものであります。

第三項　綿織物の洗濯

これから木綿織物の洗濯に就て御話し致します。貴女方が既に經驗せられました通り、木綿織物の洗濯は垢が比較的落しにくいけれども、そんなに六ヶ敷いものではありません。詰り此の木綿の織物は植物性纖維から成つて居るものであるから、洗濯劑として用ふるところの「アルカリ」の爲には別に其の糸質を傷害せらるゝことがありません。そこでたとへ遊離「アルカリ」の多い洗濯石鹼を用ひても、織物の地質がこれが爲めに弱ることはありません。されば、其の織物

の色さへ變らなければ、洗濯曹達のやうなものにて洗濯してもよろしい。又洗濯するときは如何に強く揉んでも差支のないもので、洗濯屋にて用ひて居る凹凸板(板の面を鋸刃のやうにきざみたるもの)にこすり付けてやつても大丈夫であります。そこで此織物の洗濯は貴女方の御隨意に任せます。唯此の洗濯を行ふ場合に迷信があるやうです。それは洗濯液に酢を少し入れてやればよろしいと云ふことであります。このことは間違つたことで、所謂一の迷信です。何せ、さう云ふことを云ふて居るかと云ふに、それは抑も譯のあることです。昔の色物は重に藍を以て染めたものですが、藍を以て染めたものを「アルカリ」液の中にて洗濯致しますと、藍と云ふものは多少落ちるものです。然るに反對に藍と云ふものは、酸に逢ふときは益々落ちないやうになる性質があります。そこで洗濯する場合に、其の液に酢を入れてやれば其の液が酸性になつて居るから、藍が洗ひ落さるゝことなく、甚だ都合が宜しいのです。それからして木綿を洗濯するには、酢を其の洗濯液に入るゝがよいなどゝ云ふたのであります。ところが、今は重に人造染料を以て染むるやうになりました。然るに、この人造染料

で染めたものを洗濯するときに、其の洗濯液に酢を入れてやつたところで、何の効もないのみならず、却つて垢を落ち難くし且つ時としては其の色合を鈍らすだけであります。それだから藍で染めたものを洗濯するときは、其の洗濯液に酢を入れてやつてもよろしいが、色物を洗濯する場合は、別に酢を入れない方がよろしいものであります。

次に綿織物を洗濯する場合に注意すべきことを申し上げませう。綿織物は成るべく早く洗濯をなして仕舞ふことが必要です。ところが、中には明日洗濯するから今晩から洗濯液に浸して置けば洗ふに雜作がないと云ふ考を起す人がありますが、これは織物の爲め又色の爲めにも甚だよろしくないことであります。即ち、綿織物を洗濯液に浸しましたならば、直く洗ひ上ぐると云ふやうに、早く洗濯を濟まして仕舞ふことが必要であります。それから毛織物のやうに、其の洗濯したるものは、成るべく丈速に乾かすことも亦極めて必要である。此の二つの注意を以て洗濯をやれば、貴女方の今やつて居るのと同じ樣にやつて宜しい。それから其の色さへ丈夫なものであつたならば、石鹸を用ひずに前に申

し上げた通り洗曹達で洗つても差支ありません。そこで豫め其の色を試驗して見て、洗曹達で色の變らないものならば、洗曹達にて洗濯する方が早く垢が取れますから、其の方がよろしい。

普通の洗濯は此の位に致して置きまして、次には西洋洗濯のことを少し申し上げませう。

第四章　西洋洗濯法

これから西洋洗濯の御話を致します。西洋洗濯と云へば其の意味が廣いが、私の云ふのは範圍の狹いので、「カラー」「カフス」及び「ホワイト、シャツ」の洗濯です。近頃でも尙田舍に行きますと、西洋洗濯屋がありませんから、洋服を着る人には困まる場合が能くあるものです。現に私の居る地方には、西洋洗濯と云ふべき西洋洗濯屋はありません。そこで私などは、自分の「カラー」或は「カフス」或は「ホワイトシャツ」などを自分で洗濯して居ります。この西洋洗濯は差程六ケ敷いものではありません。先づ「カラー」及「カフス」の洗濯から云ひませう。此の洗濯は次の五つの仕事から成つて居ります。

第一、　糊落し
第二、　垢落し
第三、　漂白
第四、　糊付け
第五、　アイロン掛

此の五つの工程を順々に申し上げませう。

第一、糊落し「カラー」や「カフス」などは、糊を澤山施してあるからして、之を洗濯せんとするときは、先づ其の糊を緩め且つ垢を落ち易き狀態になすことが、甚だ必要であります。此の目的を達するには、

水　一升
洗曹達　三匁

の割合に溶かしました液を用ふればよろしい。卽ち洗曹達を溶かしました溫かい湯の中に、洗濯しようとする「カラー」なり「カフス」なり又は「ホワイト、シャツ」な

りを浸し、一晩以上其儘に漬けて置くのです。斯樣にして其の糊が弛みましたならば、其の品物を取り上げ、能くそれを揉むか、或は硬き「ブラッシュ」に前の洗曹達の液を着けて表裏の兩面から擦り付くるか、或は商賣人が用ひて居るやうな板の面を鋸齒の如くきざんだ彼の凹凸板で揉んで、糊を落すのであります。尤も揉んで居る間は、時々前に漬けて置いた洗曹達の液を、其の品物に掛け、十分潤して置いてやることが必要です。それが濟みましたならば、其の次には新に

水　一升
洗曹達　三匁
石鹼　二匁

の割合を以て洗曹達と石鹼との混合溶液を作り、其溫液中に前のように一夜間浸して置くのです。それから又前と同じ樣に、手で揉むか、或は「ブラッシュ」で擦するか或は凹凸板に揉み付けて、最後に十分水洗すれば宜しい。斯樣にすれば糊は十分落ちますし、又垢も大抵取り去ることが出來るものですが、若し其の垢が十分取り去られなかつたならば、更に次の垢落を行はなければなりません。

第二、垢落。垢を落すには

水　一升
石鹼　四匁

の割合で石鹼液を作り、之を熱したるものゝ中に、前の糊落を行ふた品物を浸し、十五分間乃至二十分間煮れば宜しい。その沸騰は二十分間以上續けてはよろしくありません。若しも餘り永く煮沸致しますと、其の品物に黄色を呈せしむるやうになるものであります。斯樣にして二十分間煮ましたならば、その液から取り出して、水で十分洗ふのです。又其の液から取り出したものは、直樣之を水洗せずに、一旦其の品物を盥のやうなものに移し、之に前の煮込んだ石鹼液を掛けて、冷ゆる迄其儘にして置いて、最後に水洗しても宜しい。

以上の糊落及び垢落は、十分丁寧にやらなければなりません。特に「カラー」は垢の割合多く附着して居るものであるからして、別して注意しなければなりません。若し此の糊落と垢落とが粗末であると、後に「アイロン」を掛くる場合に、其の手拔の結果が顯はれて來るものであります。この糊落と垢落とを十分丁寧に

やつて置けば、後の仕事は容易に出來るものであります。

以上の糊落と垢落とを行ひますれば、大抵なものは漂白を行はずとも能く眞白になるものです。若しも眞白になりましたならば、別に次の漂白を行はずに、直樣糊付を行ふて差支ありませんが、十分眞白にならなかつたならば、次のようにして漂白を行ふのです。

第三、漂白。漂白する方法には、天然漂白と藥品漂白との二つの方法があります。どちらの法に依つて漂白するとも別に差支ありませんが、品物を損害せざる點に於ては、前法即ち天然漂白の方が優つて居ります。尤もこの天然漂白は大に手間を取るものであります。

天然漂白を行ふには、前の垢落に於て石鹼液から取り上げましたものを別に水洗せずに、其儘之を芝草の生ひ茂れる所の土地に廣げ、日光に曝すのです。尤も曝して居る間に於て其の品物が乾きましたならば、其の都度清水を注ぎ掛けなければなりません。斯樣にすれば、數時間乃至二三日間で純白となるものです。それから十分水洗すれば、それで其の漂白が出來上つたのであります。

藥品漂白を行ふには、漂白粉で綿糸を漂白するときのようになせばよろしい。即ち其の品物の十分の一量に相當する漂白粉を溶かして作りました漂白液中に、十分糊を落した品物を入れ、三十分間許其の液中に浸し置き、それから之を豫め硫酸の少許を添加して少し酸い位にした水の中に入れ、三十分間許浸漬して置くのです。然るときは眞白に品物は漂白せられます。それから漂白粉の臭が完全に取り去らるゝまで、水洗を行ふのです。

以上のようにして漂白したものを尙一層純白に見えしむるには更に之を多量の水にチカゴ、ブルー六Bと云ふ直接木綿染料の極めて少量を溶かしたものゝ中に入れて、能く振ればよろしい。さうすれば極めて少しく青味が付きまして益々純白に見ゆる樣になります。尙このことは、第六編仕上法に於て詳しく述べませう。是に於て十分乾かし、それから、糊付及び「アイロン」掛、所謂臘引をなすのであります。

第四、糊付。先づ糊の製法から申し上げませう。其糊は

姫　糊　粉

十五匁

水　二合乃至二合五勺
テレヒン油　珈琲匙一杯
粉狀硼砂　珈琲匙半杯

の割合を以て調合するのです。先づ姫糊粉を鉢に入れ、之に前記の水丈けを少しつゝ加へながら能く摺りつぶし、且つ其の糊を指頭につけて擦するもザラザラしないやうになる迄攪拌するのであります。それから其の鉢に蓋をして一夜間以上其儘に放置しなければなりません。若し數日間放置すれば一層よろしいもので、其の放置する時日が永がければ多少其の糊に酸味を生せしむるものであるけれども、別に何の差支もないのみならず、寧ろ其の方が實際に於て却て良き結果を表はすものであります。尤も永く放置する間に、塵埃等に依りて糊を汚さないやうに注意しなければなりません。それから愈其の糊を用ひて糊付をしようとする際に、再び能く攪拌し、其の中に前記の「テレヒン」油を加へ、更に豫め少量の熱湯に溶かしました硼砂の溶液を加へて、能く攪拌するのです。此「テレヒン」油と硼砂とを其糊の中に加ふるのは、品物に十分の光澤を出さしめんがためであります。そこで、此「テレヒン」油は極めて良質のものを擇んで用ひなければなりません。若しも「テレヒン」油の質がよろしくないものを用ひますと、其の出來上りました品物に惡臭を殘さしむるものであります。又硼砂は豫め十分熱湯にて溶かしたところで糊の中に加へなければなりません。若し溶解せざるところの硼砂が糊の中に含まれて居るときは、出來上りたる品物の所々にギラギラしたる斑點を生ぜしむるものであります。此等のことは些細なやうなことであるが十分注意しなければならんことであります。斯樣にして調合致しましたところの糊は、十分攪拌し糊の全部を能く混合した上で、糊付に向て用ひるのです。

以上のやうにして作りました糊の中に、前の糊落、垢落及び漂白を行つて十分乾かしましたところの「カラー」又は「カフス」を緩かに入れ、手を以て其の品物を能く揉んで、糊を十分吸收せしむるのです。さうして其の糊を十分吸收せしめましたならば、之を指と指との間に挾みつゝ扱いて、其の糊を絞り取るのであります。尤も其の糊を扱き絞るのには、それを挾んで居る兩指に餘り強く力を入れては

なりません。其糊を絞り取つたものは、之を乾かすと惡いからして、布或は「タオル」の樣なもので包んで置かなければなりません。斯樣にして一々糊付を行ふのです。其の糊付を致しましたならば、其の物を一々柔かに擦り又能く打ち合はさなければなりません。此の柔かに擦り且つ能く打ち合はす目的は「カラー」或は「カフス」は綿布又は「リンネル」を數枚合せて作つたものであるから、其の各層の布をして十分糊を含ましむる爲めであります。尤も其際餘り强く壓し付くるときは、却て糊の多量が絞り出さるゝ憂がありますからして、柔かに行はなければなりません。此のようにして糊付をなしたるものは、「タオル」の上に一々並べ、次に其の「タオル」を卷き、更に其の上を別の「タオル」にて包み、其表面と裏面とから兩手の掌で能く打ち付け、然る後半時間以上冷所に放置すればよろしい。それから次の「アイロン」掛を行ふのです。

第五、「アイロン」掛。前に於ては「カラー」及び「カフス」に糊付をすること迄を述べましたが、次には之に「アイロン」を掛くることを申しませう。

先づ「タオル」で包んで置いた「カラー」及び「カフス」を、一枚つゝ、机のような臺の上に

並ぶるのです。此臺は、丈夫にして且つ表面の平滑なるものを擇び、其の上は地厚の毛氈或は「フランネル」の如き毛織物にて蔽ひ、尙其の上を地質緻密であつて平なるところの「キャリコ」の如きもので蔽ふて、皺のなき樣に十分伸して置くことが必要であります。斯樣に上敷を致しましたものゝ上に、「カラー」又は「カフス」を其裏面を上に向けて置くのです。それから先づ「ナイフ」のようなものゝ刄の先で撫てかきて皺を伸ばし其の面に一二回「アイロン」を壓し當て、直ちに之を裏返して其の表面を上の方に向けて、その表面に「アイロン」を掛くるのです。「アイロン」は最初輕く壓し當て、且つ徐々に動かし、其の「カラー」或は「カフス」が乾燥し且つ平滑となるに從て、漸々强く壓し當て段々速かに動かす樣に、掛けなければなりません。斯樣にすれば、其の「カラー」及び「カフス」は十分に乾燥して光澤を發するに至るものであります。此の「アイロン」を掛けつゝある間は「カラー」或は「カフス」を時々臺より取り離して其の水蒸氣を能く發散せしめ、且つ上敷の濕りたる部分には「アイロン」を壓し當てゝ乾かさなければなりません。

以上のやうにして「アイロン」を掛け上げたものは、之を暖きところに掛け置き、他

のものに「アイロン」を掛くるのです。さうして此の「アイロン」掛が終つたならば、最後に仕上として、磨き鏝を掛けなければなりません。

磨鏝は、前のようにして「アイロン」を掛けましたものを、更に能く摩擦して艶出をなす爲めに掛くるのであります。これをなすには、先づ冷水を盛りたる鉢及柔軟なる布片を用意し、一方に又磨き鏝を熱して置かなければなりません。それ等のものは、十分清淨にして置くことが必要であります。最初は先づ「カラー」又は「カフス」を一枚宛平滑なる土敷の上に載せ、冷水で濕しましたところの布片で、其の表面を輕く濕すのです。此際は、甚しく濕めさないやうに注意しなければなりません。何せと云ふに其の水氣が多いときは、「カラー」或は「カフス」に、必ずふくらみが出來るやうになるからであります。次に其の僅かに濕めしましたし「カラー」或は「カフス」の上を豫め熱して置きました磨き鏝にて能く摩擦するのです。磨き鏝は、卵形の平たき底を有し其の一端は丸味を有するもので、貴女方が御用ひになる燒き鏝の大きなものであります。その丸味のところで能く摩擦致しますれば、最初は其の「カラー」或は「カフス」に線條を生せしむるけれども、引き續き

摩擦すると遂に平均に光澤を發するやうに至るものであります。尤も此の磨き鏝が無かつたならば、燒き鏝を用ひましても差支ありません。

「ホワイト、シャツ」を洗濯するには、其の糊落、垢落及び漂白は、全く「カラー」或は「カフス」を洗濯するときと同じようにするのです。唯この「ホワイト、シャツ」の場合は糊付が少しく六ケ敷いだけであります。即ち此の「ホワイトシャツ」の場合には襟のところと「カフス」のところ及胸のところに澤山糊を付けて、他の部分には極めて少しく付けなければならんのですが、之が少し面倒であります。然るに糊と云ふものは、乾いて居るところには多く付くものであるが、濡れて居るところには割合付かないものであるから、此の性質を應用して糊付をやればよろしい。即ち糊落、垢落、及漂白を行ふた後、十分に乾かしました「ホワイト、シャツ」を取り、之を裏返にし、次に其の兩方の「カフス」の部分と襟の部分とを一緒にして左の手にて持ち、水を以て濕めしました布片にて強く糊を付けてならぬところのみを一樣に濕めし、さうして「カフス」及び襟のところと胸の部分とには一滴の水をも落さない樣にするのです。それから之を糊の中に入れ「カフス」及び襟のところと

胸の部分は能く揉んで糊を布の各層に十分浸み込ましめ、他の部分は其の儘にして置いて成るべく糊を浸み込ましめないやうにすればよろしい。

以上のやうにして糊を付けました後は、其の「シャツ」を疊み糊を強く付けました部分を皆内側になるやうにし、其の外部に水を少しばかり撒布して一様に浸み渡らしめ、堅く卷き附けて三十分間以上放置するのです。それから「アイロン」を掛くるのです。「ホワイトシャツ」の襟、胸部、及び「カフス」のところに「アイロン」を掛くる方法は大體に於て前に述べました「カラー」及び「カフス」の場合に同じであります。即ち先づ「シャツ」の裏返にして、あるものを表に向け直し、之を上敷の上に載せ胸部の部分を上向となし、第一に襟のところに「アイロン」を掛くるのです。次に「シャツ」の背部を上向となし、胸部の裏面に「アイロン」を掛け、それから其の表面に掛くると云ふやうに裏面表面と交互に數回「アイロン」を掛ければよろしい。次に背部及肩部の裏面と表面とに「アイロン」を掛け最後に「カフス」に「アイロン」を施すこと前に述べましたやうにするのであります。其の「アイロン」の動かす方も前に述べました通りであります。この様に致しまして「シャツ」の硬くなすべ

き部分に「アイロン」を掛けましたところで、其の他の部分にも「アイロン」を壓し當てゝ摩擦するのです。それから其の襟「カフス」及胸の部分に、磨鏝を掛けて光澤を出さしめなければなりません。

これで西洋洗濯のことも終へましたから、次には汚點拔きのことに就て御話致しませう。

第四編　汚點拔法

第壹章　總論

洗濯のことに付きましては以上に申した樣に致せば宜しいのですが、衣類には、普通洗濯によりて除き得らるゝ汚れの外、汚點所謂「シミ」が往々出來るものであります。之は、どんな上手に洗濯致しましても決して取り去ることが出來ないものであります。それ故洗濯の外に、汚點拔きと云ふ別段なる法を行ふ必要があるのです。そこで、こんどは、汚點拔に就て御話いたします。

抑も汚點と云ふものは種々の事情からして出來易いものでありまして、併も衣類の價値を損じ其の及ぼす影響は著しきものであります。其は貴女方も、とくに御承知のことでございませう。所が東京邊ならば、汚點拔の專門に熟練した商賣屋も澤山ありますから、之に任かすれば別に差支はない樣なものですが、少し田舍の方へ參りますと、此の道に熟練なる商賣屋は甚だ稀でありますから、可惜晴れの着物も傷物にして仕舞ふ樣な場合に出くはさなければならぬ時が

あるのです。元來汚點と云ふものは、前にも言ふ通り其の生じました當時に早く適當の手段を施しますれば、何の雜作もなく取り去らるゝものであるが、日を經るに從ひ段々と六ヶ敷くなりまして、時としては到底取り去り得ないものとなるものです。斯樣な次第でありますから、貴女方にしても其の汚點拔き法を覺えて置けば大に便利な場合があることゝ信じます。併しながら汚點拔きは是迄申した簡易染色とは違ひまして、餘程六ヶ敷いものであります。何故に六ヶ敷いかと云ふと、汚點拔きの方法は其の汚點の新らしいものと古いものとにて手段が一樣には行かぬものであるからです。そればかりでなく又其の色合に依て多少違つた方法を取らなければならぬし、夫れから又纖維の種類によりまして其の方法が異なるものであるからです。例へば、同じ酒の汚點が出來たと致しましても、絹、毛、綿を通じて同じ樣の手段にて汚點を除くことは出來ません。よしや汚點丈は除き得ると致しましても、地質を害することがないとは申されません。否な寧ろ多くの場合にあるものであります。斯樣に其の事情の色々とある丈、仕事は困難になるのであります。そこで家庭の仕事と致しまし

て、汚點拔きは稍無理の注文かも知りませんが、夫れかと申して拔き易い汚點を捨て置て、後に取り返しの出來ないことになりますのは甚だ面白くないことです。そこで、よしや充分に汚點を拔き得ないまでも出來る丈の手段を施すことは、丁度急病人の出來た時に醫師の來るまで、ともかくも救急療法を行ふ樣に汚點の出來たときに之を商買屋に渡す迄の一時の療法として、成る丈け汚點が落し易いやうになし置くと云ふことは、これを洗濯や洗ひ張りと共に心得て置くのが、第一貴女方の一つの務めと思ひます。そこで是から順を追ふて如何なる汚點は如何にすべきやに就て御話いたします。之は色々の化學的理由のあるので唯從來の經驗からのみに依りて出來るものでもなく、又呪咀のやうな方法で出來るものでもなく、所謂化學的理論の土臺から割り出したそれの應用に外ならないのであります。併しながら、一々其の理論にさかのぼつて述べますれば到底少時間に述べ盡されませんから、唯其の方法と順序丈けに止めまして成る可く多くの事に例を取りまして述べよう。其の方法の中には、或は貴女方が既に御聞きになつた方法と多少違つたものもあるでせう。併しながら、吾々の實驗した併も就中結果の良きものを述ぶるのでありますから、決して間違はないつもりであります。

第貳章　汚點拔の手續

第一節　油及脂肪の汚點拔法

之は能く出會ふ汚點であります。其の油とか脂肪とかの汚點には二種ありまして、一つは石鹼で洗へば落つるのと、他の一つは石鹼で落すことが出來ないのです。石鹼に依て洗ひ去ることの出來る油の汚點は、前に申しました濕潤洗濯法に依りまして充分奇麗に拔き去ることが出來ますが、この石鹼で取り去ることの出來ぬ油の汚點は、別の方法に依らなければなりません。即ち之を拔くには、さきに乾燥洗滌法に於て用ひました油の溶解劑を用ひるのであります。即ち「ベンジン」又は「ペトロリームベンジン」を用ふると宜いのです。其の方法は第一に下の方に羅紗の如き毛織物を敷き、其の上に汚點を拔くべき品物を載せて置き「ベンジン」を海綿又は筆の如きものでも宜しい」にひたし之を若しも「ベンジ

ン」を得られぬときは貴女方が御用ひなさる揮發油にても差支ありません」其の汚點の部分へ塗り付け其の上の方から吸取紙を載せて、左程ひどく熱せられない鏝を其の上から掛け能く擦るのです。斯樣にすれば油の汚點は充分取り除けられて仕舞ふものです。若しも之のみにて十分に取り除け盡きぬ時には其の上に今一度前の仕事を繰り返して行ひますれば、大抵の油汚點は落ちるものです。斯樣にして汚點除きを行ひますれば、決して色合を變せしむるとか、又其部分の變色を來すとか云ふ恐れは、少しもありません。新らしい樣な工合に奇麗になります。唯此の場合に揮發油を用ひますると、前にも申す通り多少の臭が殘りますから、その時には湯氣に觸れしめまして臭を取る必要があります。それから貴女方が能く出遇ふのは、汗の汚點です。次に其の汗の汚點を拔く方法を申しませう。

第二節　汗の汚點拔法

汗の汚點は、其の出來たる當時ならは唯水にて洗つた丈けにても宜しい。併し汗の汚點が稍古くなりますと、水位にては到底落ちぬものとなります。殊に其の汚點が非常に永き月日を經たものであると、如何なる手段を用ひましても取り去り得ない樣になります。大體汗の爲めに汚點が出來ると云ふのは何故かと申しますと汗と云ふものは、元來一つの酸であるので所謂一つの有機酸でありますから、此酸が色に作用するからです。夫れ故汗の爲めに汚點が出來たと醋酸の爲めに汚點が出來たとは同じことです。さうして大抵の色物に汗が付きますと赤味を帶ぶるとか黃味を帶ぶるとかの汚點が出來るものである。其の場合には多量の水に少しの「アンモニア」水を注ぎまして其の液を嗅げば僅かに「アンモニア」の臭のする位に作りたる其の稀薄なる「アンモニア」水を、汚點の部分へ塗り付ければ宜しい。左樣にすれば色は元の通りに返りまして汚點は除き得らるゝものです。貴女方の肌着などに餘り汗が付きましたときには、早くすれば、汗にて、衣服類に汚點の出來るとか織物の地質を害するとかの心配もなく、勿論色を變ずる樣な心配はありません。木綿織物などには汗は害し易いものですから、一層必要の事であります。

此次には、臘、樹脂の汚點拔きを申します。

第三節　臘、樹脂の汚點拔法

此の汚點は中々拔くに困難であります。之を拔くべき手段は、第一に小刀又は竹篦のやうなもので靜に樹脂を削り取り去るのです。尤も餘り烈しく削りますと、生地を損しますから、極く柔かに爲なければなりません。次に其の處に油を塗り付けまして乾かし、さうして、次には前第一節の所に云つた脂肪の汚點拔き法によりまして拔くものです。さすれば大抵の臘とか樹脂の汚點は取り去ることが出來るものです。併し此の法にて充分取り去ることが得ませんならば酸化「マグネシヤ」と云ふものを「ベンジン」にて練り、團子の樣なものを作つて用ひるのです。此の酸化マグネシヤ」と云ふものは藥舖に行けば求めらるゝものです。そこで此の團子の樣なものを汚點の部分に塗り暫時其儘にて放置致しますと、段々乾いて來ます。其の乾きましたる後に「ブラッシュ」を以て其の團子の粉を皆取つて仕舞ふのです。さうすれば、少しも跡を止めず、又色を變ずることもなくして、全く取り去ることが出來ます。次には「ペンキ」の汚點を申します。

第四節　「ペンキ」の汚點拔法

「ペンキ」の汚點を取ることも、六ヶ敷い方の側なのであります。併し新らしいものは、容易に取ることが出來ます。其の方法は前の臘、樹脂等の汚點拔き法に依てやれば宜ろしい。併し餘り古き汚點は中々そんな方法位にて到底拔けません。其古きものには、「ターペンタイン」と云ふ溶液と、「クロヽホルム」と、此の二つのものを同じ位に合せましてそれを塗り付け、油の汚點を取るときの樣に其の上に吸取紙を置き熱き鏝を掛けて拔くのです。斯樣にすれば「ペンキ」の古き汚點も取り除くことが出來ます。

第五節　鐵の汚點拔法

鐵の汚點と云ふと如何なるものかと云へば、貴女方は着物は大抵衣紋竹に掛けるでせうが問々釘に掛ける場合もありませう、此場合に鐵の錆が赤くクッ着き汚點が出來ることがあるが、斯樣に鐵氣に觸れて錆のクッ着た汚點を云ふものです。之を取るには、是非共酸類の力を借らなければなりませぬ。そこで極く淡き僅の汚點の出來たならば醋酸を其所に塗り、さうして水にて能く洗ふので

す。又醋酸の代りに、蓚酸を用ひても宜しい。即ち蓚酸は成る可く濃くとかして、其の液にて汚點の部分を洗ひ、其の後を水にて充分に洗へば宜しい。稍汚點の濃きものには、最初に其の部分に錫の粉末を塗り付けて置き、次に醋酸なり又蓚酸なりを前の樣に塗り付け、後水で洗へば大抵の汚點は取れます。若し尙取れざる場合には、枸櫞酸と酒石酸の二つを同じ割合で合せたるものを作用すれば宜しい。即ち其の汚點の部分を最初湯で洗ひ能く濕して置き、其の上に酒石酸と枸櫞酸の混合物を塗るのです。斯くすれば見る間に汚點は取り去られます。そこで其の後を能く水にて洗ふのです。斯樣にすれば、如何なる鐵の汚點も取り得ぬものはありません。併しながら、此の方法は色物に行ふ事の出來ないのであります。何故かと云へばそれを色物に行ふときは汚點が取り去らるゝと同時に其色が變化して來るからです。故に色物に此方法を應用することが出來ません。色物に着きました鐵の汚點は、マルセール石鹼を取り之れを水と殆んど同容積に溶かして、其の中に石鹼と同量の「グリセリン」即ち「リスリン」を入れ、能く攪き混ぜて拵へたものを、今の汚點の部分に塗り付けて二三時間も置けば、大抵は取り去ることが出來ます。其の後を能く水洗して置けば宜しい。若しも之で尙充分取り切れぬときは、今一度此の遣り方を繰り返しさへすれば、如何なる汚點も、容易に且つ安全に、又地質を弱らせることもなく、色合を變らせないで、汚點丈取除かれます。次に「インキ」の汚點に就いて申します。

第六節　「インキ」の汚點拔法

「インキ」の汚點は、其の「インキ」を製造した原料に依て拔き取る方法が多少異なる譯であります。併し色「インキ」は大抵鹽基性染料で拵へて居るものであるから、此れを取るには極く容易であります。既に皆さんの知れるが如く、鹽基性染料は石鹼では甚だしく脫色するものであるから、此理によりまして此の汚點は石鹼の液を以て洗へば宜しい。併しながら石鹼で洗ひますと、其の汚點が取れると同時に其の布の色も幾らか落ちて參りますから、色物の場合には石鹼は用ひられません。他のものに依らなければなりません。即ち「アルコール」に「アンモニア」水を大抵同じ位混ぜ合して拵へた液を、筆の樣なものにて何回も其汚點に塗りますれば汚點が全然拔けるのです。若し白いものに出來た汚點なれば、以上

の樣にして汚點の大體を拔きました後に「カルキ」の漂白法を以て所謂晒しを行へば、一層宜しいものになります。併し此の「カルキ」の漂白は木綿や麻の如き植物性の纖維で出來たものに限るのです。羊毛、絹の如き動物性纖維には「カルキ」は決して宜しくないのであります。若し絹又は羊毛などの場合には、次の樣な方法が宜しい。元來絹物や毛纖物は、極く色の剝げ易いもので、而も動物纖維は「カルキ」にて漂白することの出來ないものであるから、石鹼の溶液に「アンモニア」を入れて拵へた所の溶液で洗へば宜しい。又「トタン」の粉狀になつて居る亞鉛末と申すものがありますが、之に酸性亞硫酸曹達と申す藥品を入れて攪き回わして置きますと、亞鉛末は沈みまして上の方には奇麗に澄みたる水樣のもので一種の漂白劑が出來ます。之を漂白粉の溶液を取るときの樣にして別の器に入れまして、汚點のある品物を入れ少しく溫めます。斯くすれば汚點は段々と淡くなります。充分淡くなりましたときに取出しまして、次に石鹼の溶液を少しく溫めました液に何回も液を取り替えて洗ふも宜しいのです。然るに若し「インキ」が黑の樣なものであれば、其の中に鐵分を含んで居るから、とても今の御話し申した樣な方法位で拔け難いものです。此の場合は前の鐵の汚點と同じ樣に行へば宜しい。此の仕事は極く注意してやりますれば完全に容易く出來るものであります。

第七節　乳、牛乳、茶の汚點拔法

此の汚點は左程六ヶ敷いものではありません。「エーテル」或は「ベンヂン」と云ふ樣な脂肪の溶解劑で處理すれば宜しい。其の手段は脂肪及び油の汚點拔き法と同じ事です。即ち毛纖物の上に其の汚點のある部分を載せて、そこに「エーテル」か「ベンヂン」を塗り、吸取紙を當てゝ拭ひ取るのです。唯其時に其の纖物が絹纖物であれば多少汚點の取れた跡が「ボンヤリ」して居るものであるからして、此の場合には極く淡き「アルコール」を海綿に浸して其部分を拭へば宜しい。斯樣にすれば全く汚點は跡方なく拔き取られるものである。

第八節　果實の汚點拔き法

果實の汁の爲めに現はれたる汚點を取るには、硼砂と「アンモニア」とを水に溶かして、其の溶液にて汚點の部分を洗へば宜しい。尤も硼砂の溶液と申しまして

も、硼砂と云ふものは水には溶解せぬものであるから、最初熱湯で能く溶かしてから水を加ふれば宜しい。斯樣に硼砂と「アンモニア」の二つを混合して作つた液を汚點に注ぎて洗ひますれば、其の布の色を變化せしむることもなくして、完全に汚點を拔き取ることが出來ます。若しも其の織物が植物性纖維から出來たものならば、即ち木綿、麻等の織物であれば、漂白法に依り「カルキ」を用ひて晒しを行へば宜しい。併しながら若しも織物が、毛織物、絹織物で、硼砂及び「アンモニア」の溶液で洗つて十分其汚點が取れなかつたならば、酸性亞硫酸曹達を汚點の部分に浸し他の布を以て拭ひ取れば宜しい。そこで充分取れたならば一旦水洗して次に醋酸とか或は酒石酸とか云ふ有機酸を多量の水に溶かしました淡き液にて洗ひますれば、織物を弱らする恐がありまん。

第九節　酒及砂糖の汚點拔法

酒及砂糖の汚點も、前の果物の汚點拔きと同じ方法で取除くことが出來ます。硼砂と「アンモニア」とを混合した溶液を以て其の汚點の部分を洗へば、奇麗に汚點が去られます。併しながら極く新らしい汚點は唯水にて洗ふた丈にて落ちるものであります。少時にても手後れたる汚點には硼砂と「アンモニア」を用ひた方が完全です。此の酒の汚點と云ふものは、長く經るに從ひ段々と拔け難きものとなるものだから、成る丈新しい内に、即見付け次第に取除くる方が宜しい。

第十節　黴の汚點拔法

少しく汚れたものを其儘にて捨て置くときは、黴の付くものですが、殊に入梅頃の濕氣多きときには、能く黴の生ずるものです。元來此の黴は、着物の地質に害を及ぼし又色合を變化するもので、一時も捨て置くことの出來ないものであります。之れを取り除くには、唯一つより外良い方法がないのです。先づ第一に日光に晒して黴を乾かしまして、其の大部分を「ブラッシュ」にて掃き取り、次に前申した汗の汚點除きと同じ方法を應用し「アンモニア」の淡い液にて黴の部分を能く洗へば、汚點は落ち去るものです。併し黴の爲めに色の既に剝げて仕舞ふたものは仕方がありません。

御話が少し横道へ渡りますが、世間の多くの人は塵が衣服の保存の上に就て如何なる關係があるかを知らぬらしいと思ひます。そこで、能く塵の付いた衣服

を其儘にて仕舞つて置いて平氣で居る人があるが、それは甚しく宜しくないことです。斯樣にすれば、色合に變化を及ぼすのであります。夫れのみならず、地質をも弱むるものであります。貴女方の平常用ゐらるゝ半襟とか、洋服の襟などか、常に塵を十分取らずして其儘に捨て置くと非常に早く色が變じてくるものであります。貴女方の晴れ着の半襟などが、大切にして簞笥の内に仕舞つて置く間に意外に汚なくなることがあるでせう。之は所謂塵などが自然に色に働きました證據であります。それで塵或は黴と云ふものは非常に色合を變化させ褪色せしむる力を以て居るものだと云ふことを、思ひ合せば自然と合點せらるゝでせう一寸考へますれば何んでもなきかの樣ですが、前に申す樣な工合に莫大の關係を持つて居るものであります。ところで日本等では色の丈夫か不丈夫かを試みるときに、塵の爲めに色の變るや否やを試みることはこれまでやりませぬが、外國などでは極めて重大なものとして此の塵の爲めに受ける有樣を調べまして色合の强弱を判定いたします。勿論外國の婦人の洋服などは土の上を往々摺りますからでもありませう。それであるから貴女方が外出せられて家に歸つた時などは、直ちに衣紋竹に掛けて乾かし其儘藏めることは、衣服の保存上大に宜しくないことである。必ず前に御話申した通り一度「ブラッシュ」を掛ける樣になされた方が宜しい。黴のことは此の位にして次には尿水の汚點に移ります。

第十一節　尿水の汚點拔法

之は小兒の着物に屢々ある汚點にて、隨分立派な着物にも小供は遠慮なく放尿いたしますので、此の汚點拔きは家庭にて屢必要を感ずることです。此の除き方は「アルコール」を淡くして、それに極く僅かに硝酸を入れ之れを嘗めて酢くない位に幾らか酸性のものとして用ひます。硝酸の分量が多ければ布を損ふものです。それ故先づ大凡の分量を言へば、水一升に付て五匁位を入れゝば宜しい。此の液を以て其の汚點の部分を洗ふのであります。若しも此の法で汚點の取り得ないとすれば、其の後は如何なる法を以て取り除けやうとしても除き得られぬものであります。所謂此汚點が出來てから永く月日を經ました古きものは拔き得られぬものです。そこで新しい間に直に早く落す法が得策であ

ります。

今迄述べましたことを、表に書き顯はしますれば、別表の通りであります。

織物種類 / 汚點種類	白キ綿織物	染メラレタル綿織物	白毛織物	絹織物
油脂	石鹸ト曹達ノ溶液	染メラレタル毛織物	石鹸液ニ「アンモニア」ヲ入レタルモノ	同上
脂肪	暖カキ石鹸液			ベンジンエーテル「アンモニア」
臘松脂	(ターペンタイン)ト(クロロホルムノ液)ニテ處理シ後石鹸ニテ洗フ		(ターペンタイン)ト(クロロホルム)	
鐵イソキ	酸醋酸液	染色ノ堅牢ナル者ニハ(枸櫞酸或ハウスキ鹽酸)染色堅牢ナラザル者ニハ石鹸ト グリスリン溶合物	白キ綿織物ニ同ジ	同上
	酸醋酸液			
	酸ハウスキ鹽酸			
砂糖膠	一般ニ清水或ハ溫水ヲ用ユ		溫水ヲ以テ洗フ	
血液				
果酒	晒粉ノ稀キ液	石鹸及「アンモニア」ノ混合物	酸性亞硫酸曹達或ハ石鹸ト「アンモニア」ノ混合物	
實				
色インキ	果物ノ汁ノ汚點ノ場合ニ同シ			
酸類	新ラシキモノハ(アンモニア)ニテ洗ヒ後水ニテ洗フ但シ硝酸ノミハ除クコト能ハス			
酒ヨーヒー	果物ノ汚點ノ場合ニ同ジ			

第五編　色上げ法

第一章　論總

色上げと云ふものは、如何なる場合に心要なるものであつて、如何なる仕事をするものであるかと申しますれば、衣服及び其の他の織物などの色が褪めたときや或は汚れたときに前と同じやうな色になしたいと思ふとき、或は色合を時世の流行に合はする爲めに前と違ふた新しい色に染め返すときに就て、行ふべき仕事なので、ありまして縞織物の色上げは特に裕に目引と申します。此色上げのことを貴女方が能く覺えて居られて、之を家庭に於て實際に行はるゝやうになされましたならば、衣服の整理上大に便利なことだらうと思はれます。然しながら此の色上げと云ふものは、隨分六ヶ敷い仕事であります。何故に色上げはそんなに困難な仕事であるかと云ふことを申しますれば、即ち次の通りであります。

第一　色上げせんとする織物は、毛の纖維から織られて居るか、又木綿纖維か

ら出來て居るか、或は絹の纖維を以て織つたものであるか、又は交織物であるかと云ふやうに、其の織物の原料に就て調べなければなりません。一寸考へますと、此の原料の何たるやを見分くることなどは容易なことのやうに思はれますが、人造絹糸もあればシルケットもあると云ふ樣に、其の化學的性質が違つても物理的性質の等しい糸より成れる織物の續々市場に現はるゝ現今に於ては、實際容易なことではありません。斯道の專門家と雖も、纖維の何たるを見分け損ふことが往々あることであります。然るに此の色上げと云ふものは、其の纖維の種類如何に依つて多少其の方法を異にしなければならんのに、其の纖維の何たるやを見分くることが出來なかつたならば、從て色上げも完全に行ふことは出來ません。これが即ち色上げといふものは、六ヶ敷い仕事であると云ふ理由の一つであります。

第二　色上げせんとする織物は、先きに如何なる染料を用ひ如何なる方法に依つて染めたものであるかと云ふ見分けをなさなければなりません。何故かと云ふに、其の織物が染められたる染料及び染色法の如何によりて、大に其の色上げ法を異にしなければならんからであります。ところが染料の數は、なか〳〵多いもので、現今は既に二千以上にも達して居るからして、染色の專門家でも、以上のやうに其織物の染められて居る染料及方法を見分くることは、容易なことではありません。まして其の道に關する智識の少ない人、所謂素人には、とても望み得べからざることだらうと思ひます。これ又色上げといふものは六ヶ敷い仕事であると云ふ理由の一つであります。

第三　色上げを行ひますと、時としては其の品物を目茶苦茶にして其の地質を傷むるとか、又は大に品位を貶さしむることがあるものであります。例令は赤色に染められて居る布を青色に色上げしたいと思ひますれば、先づ其の赤い色を拔き去つて一旦白きものになし、それから青色に染むると云ふやうに、色上げを行ふには、先づ大抵もとの色を拔き去らなければなりません。即ち先つ色拔きをなさなければなりません。さうでなければ、完全な色上げは出來ませんものであります。然るに此の色拔を致しますと、其の使用する藥品即ち色拔劑の爲めに、該識物の地質を傷害することが往々あるものであり

ます。これも亦色上げと云ふものは、なか〳〵六ヶ敷い仕事であると云ふ理由の一つであります。

以上述べました通り、色上げと云ふ仕事は、甚だ六ヶ敷いもので、從て仕損じも出來易いものであります。色上げ屋に色上げをなさしむると、中々高い色上賃を取るものであるが、其の困難な仕事であると云ふ點から考へて見ると無理のないことであります。

商賣人でさへ困難な仕事である、六ヶ敷い仕事であると、認められて居る此の色上げ法を、此處で貴女方に御話し申しましたところで、貴女方の中には或は家庭に於てやり切れないから聞く必要がないなどゝ思はるゝ御方もあらるゝでせう。然れども色上げと云ふ中には極めて容易な色上げもありまして、此等は別に色上屋の手を煩はさずとも高い色上賃を拂はずとも、貴女方の手で容易に出來るものでありますから、私は其等の容易すい色上げ法を述ぶる積りであります。色上げの中で最も難作なく出來ますものは、元との色と同じ色で稍其色合の濃いものに染め上ぐる場合であります。たとへば紫色の布か褪色して見苦くなつたと云ふ時分に、元よりも少しく濃い紫色に色上げを爲さんとする場合それから又縞織物などの色合が褪色したものか流行に後れたときに色上を行ふ所謂目引の場合等で、之は容易すく出來るものであります。元と同じ色にしても、前と同じ位の濃さの色合に色上げするとか或は前よりも少しく淡き色合に色上げするとか、と云ふ場合は、稍六ヶ敷いものであります。又全く色の違つた色に色上げするとか、特に反對なる色合、即ち青色に染められて居るものを黃色に染め返すとか、赤色に染められて居るものを綠色に染め返すとかと云ふ色上げになると、中々六ヶ敷いもので、家庭に於ては、やり切れないかも知れません。色上げせんとする織物は、普通一旦使用したものでありますからして、大抵其の所々が汚れて居るものであることは、私が申すまでもないことであります。然るに其汚れて居る部分と汚れて居らない部分とでは、どうしても一樣に染まらないもので、そこに多少の染斑が表はるゝものであります。そこで此の色上をする前には、是非共先づ洗濯と汚點拔とを行ひまして、其の布の何れの部分も同じ性質を持つて居る樣に、言ひ換ふれば一樣に染液を吸收する樣になして置か

なければならんものです。斯様な次第であるからして色上げと云ふものは如何に雑作なく出來るものとはいへ、唯其の色上げせんとするものを簡易染色法の編で述べましたやうにして染むる丈けにては、到底完全に出來上るものではありません。簡易染色法に依りて染色する際に必ず其の準備工程として精練或は精練漂白を要するが様に此の色上げをするにも、それ〳〵相當の準備工程が必要なものであります。其の準備工程とも云ふべきものは何んであるかと云ふに、それは今申した所の洗濯と汚點抜とであります。然るに此の洗濯及び汚點抜のことは前編に於て述べましたから直に色上の手續を御話申しませうと思ひますが、色上げの種類に依りては其の準備工程として洗濯及汚點抜の外、色抜と云ふ仕事が必要なこともありますから、次に一寸此の色抜のことに就て申し上げませう。

第貳章　色抜法

前章に於ても一寸申し上げました通り、色抜と云ふものは、なか〳〵六ヶ敷い仕事で稍もするときは、やりそこなひまして其の布の地質までも痛むことがあるものであります。然しながら如何なる染料で染め上げた色と雖も適當なる色抜法を行ふたならば抜けぬと云ふものは恐らくありません。けれども此の色抜きは家庭の仕事としては稍六ヶ敷く且つ經濟上稍危險なものであるからして、此には唯容易に家庭に於て應用し得らるゝもので、しかも地質を弱むると云ふ様な恐れのない安全な色抜き法だけを御話し申して置きます。

吾々が色を抜かんとする場合は、先づ第一に此の色は如何なる藥劑で抜けるものであるかと云ふことを調べ、それから直様相當の法に依りて色を抜くものであります。併しながら貴女方に向ては其の注文は無理であります。貴女方は、とても此色は何んで染めたか或はどんな藥品で抜けるかと云ふことを見分くることは出來ません。そこで貴女方が此の色抜をなさるには、吾々がやるときのやうに其の適當なる抜き方を考へず、如何なる色でも先づ最初或る一の方法で抜いて見らるゝ方がよろしい。若しも其の法に依りて抜けぬ場合は、次に他の方法を行ふのです。この様に最初は簡單で然かも安全な色抜を行ひ、それか

ら段々複雑なる色抜きを行つて見ることが、最も得策であらうと思ひます。そこで此には、その樣にして行ふべき色抜法を順々に申し上げませう。

先づ第一に行ふて見るべき色抜き法は、石鹼抜きとでも申しませうか、兎に角其色抜きをなさんとするものを石鹼の溶液で煮るのであります。即ち

水　一　升
ガレール石鹼　二匁五分

の割合を以て石鹼液を作り、其の熱液中に今色抜きをなさんとするものを入れて煮るのです。さう致しますと、其染め色は漸々石鹼の溶液中に溶け出で來るものであります。尤も其の色を染めた染料の種類に依りては、容易に石鹼液中に溶け出ぬものもありますが、それは甚だ少ないもので大抵なものは、溶け出るものです。併しながら如何に石鹼の熱液中に落ち易い色であつても、唯一回石鹼液で煮ました丈では全く其の色を落すことは出來ませんものであるが、其丈けにて最早望みの色に色上げすることに向つて妨碍を與へない位迄に淡くなつたならば、それを一旦湯にて洗ふて十分石鹼質を取り去つたところで、色上げを行ふても差支ありません。若しも尙十分色を落す必要がある場合は、以上の石鹼液から取り上げましたものを更に。

水　一　升
石鹼　二匁五分
洗曹達　二　匁

の割合を以て作りました石鹼の新しい熱液中に溫して、暫く煮ればよろしい。それから、前の樣に湯にて能く洗ひて石鹼質を全く取り去るのです。斯樣にすれば其の原の色は甚だしく淡くなるものであります。又品によりては之れにて殆ど白くなるものもあります。彼の甲斐絹の樣なものは此丈にて大抵色抜きが出來ます。

此石鹼液で色を抜くことは極めて安全なる仕事で地質を弱むると云ふ樣なことがありませんから、數回其新しい石鹼液中に煮ても差支ありません。尤も之は纖維が絹であるときに一番適當した方法でありまして、毛の塲合などには熱石鹼液で長く煮ると糸とが互に喰ひ付いて織物の見えが大變惡くなります。

そこで毛織物の場合は絹よりも石鹸の量を少なくし輕く煮る方がよろしい。此の法は又木綿にも適用せられますが寧ろ此の場合には木灰の灰汁又は洗曹達を用ひますれば仕事が手早く出來ます。併しながら最初染めた染料の如何によりては此の方法に依りて色を抜くことが出來ませんものもありますから、一旦此の方法を行ふて見て、尙其色が落ちなかつたならば、更に尙次の色抜き法を行はなければなりません。

色を抜かんとする織物の目方百匁に對して先づ

ロンガリットC	五匁乃至七匁
水	七升位

の割合にて色抜液を作り、其の中に色抜しようと思ふ織物を入れて暫く煮るのであります。其の液が稍沸騰し始めると漸々に色が抜けて來るものである。斯樣にして織物の色が充分に抜き取られましたならば其の液中より絞り上げ一旦石鹸の熱液(前に申しました石鹸抜の場合の分量にて洗ひ更に湯其の次に水にて洗ふのです。此のロンガリット抜に依りますと大抵な色は完全に抜くことが出來るものであります。

茲に「ロンガリット」の分量を五匁乃至七匁と云ふ樣に距りをつけて置きましたのは色の抜き易きものと抜き難きものとに依つて加減し、又色の濃いものと淡いものとに依つて增減する必要があるからであります。尙又一時に澤山のものを色抜する場合は僅かのものを色抜する場合よりも「ロンガリット」の量を少なく用ひてよろしい。其の邊は適宜分量を加減して用ふるやうになさらなければなりません。尤も前述の分量を用ひても色が抜けないものは其の物に向つて「ロンガリット」の色抜が不適當なものであるから、それ以上の分量を用ひない方がよろしい。

此「ロンガリット」Cと稱する藥品は近來輸入して來たもので目下盛に使用されて居る色抜劑で至極安全に且つ有効なものであります。そして此の色抜劑は木綿にも絹にも又毛にも應用し得らるゝのみならず、それ等の地質を傷害する樣なことはありません。そこで此の色抜劑は色抜屋に向つては勿論貴女方にも最も適當したものであると思ひます。而して此の「ロンガリット」Cは普通の

藥屋では或は未だ賣つて居らんかも知れませんが、染料屋には必ず賣つ居ります。百二十匁で一圓六七十錢でありますが小分けしても賣つてくれます。此のロンガリットの餘分なものを貯へて置く場合は必ず玻璃瓶殊に色玻璃瓶の中に入れて固く栓をしなければなりません。若しさうしなければ漸々空氣中から濕氣を吸收し且つ其他の作用を受けて色抜劑としての力がなくなるやうになるものです。

もう一つ家庭に於て容易に出來る稍安全な色抜法を申し上げませう。先づ絹織物なり毛織物なり又木綿織物なり、其色抜をせんとする品物百匁に對し

亞鉛末　二十匁
酸性亞硫酸曹達　十六匁
醋酸　四匁

の割合に取り品物が十分くゞる丈けの熱湯に亞鉛末と酸性亞硫酸曹達とを入れ次に醋酸を注ぎたる後、品物を入れて能く操り返しつゝ其液を極めて緩かに沸騰せしむるのです。然すると大抵な色は抜けて仕舞ふ物です。併し其の物を絞り上げて空氣に觸れしむるとか又は水洗すると元の色に還へります。そこで別器に石鹸と洗曹達の混合溶液を作つて置いて前の色抜液より出すや否や極めて迅速に其の石鹸液中に入れ還えして、色が消えて居る染料を布から洗ひ去らなければなりません。斯く石鹸と洗曹達の混合溶液で洗ひまするとの後は空氣に觸れても水洗しても色が元に戻ることがなくなりますから、最後に十分水洗し布目に附着した亞鉛末を除去しなければなりません。前述の酸性亞硫酸曹達の分量は其の粉狀體のものを用ゐる場合であるが、若し市販の液狀のものを用ふるときには約五十匁を取ればよろしい。そして粉狀も液狀も同じ効力をなすものです。

此の法に依りますと大抵な色殊に困難である藍で染めたものでも完全に色抜をすることが出來ます。そこで此の法は各地の色抜屋に於て實際行はれて居ります。貴女方も色の剝げた「リボン」や半襟を此法に依つて色抜をして御覽なさい中々面白く抜けます。

以上の方法を行ひますれば、大抵色抜きの目的を達することが出來るものであ

るけれども、尙十分其の色を抜くことが出來なかつたならば、更に他の色抜法を行つて其の目的を達しなければなりません。其の色抜き方が澤山ありますが、少しく其の當を誤れば地質を傷むる傾向のあるもので、從て其の行ふ手際が熟練し且つ多少の經驗を重ねた人でなければ取り扱ひ難きものであります。貴女方が御やりになることゝしては、甚だ六ヶ敷い仕事で、少しでも其のやり方が宜しくないときは、著しく其の地質を傷むるものであります。そこで家庭に於て色抜きをなさんとするときは、以上述べました方法位をやればよろしい。此の上の色抜きは色抜屋に任して抜いてもらふやうになさるゝ方が得策であります。

これで簡易なる色抜き法を述べましたが、兎に角斯樣にして色抜きを行ひますれば、後はどんな色にでも望み通り色上げをすることが出來ます。そこで次には色上の手續を申し上げませう。

第三章　染上げの手續

色上げの場合を大きく分類すれば、次の二つであります

一　原色と同じ色に色上げする場合。

一　原色と異なりたる色に色上げする場合。

此場合の如何に依りまして、其の色上げする手續が多少違つて來るものであります。そこでこれを別々にして其の手續を申し上げませう。

第一節　原色と同じ色に色上げする手續

原色と同じ色で、同じ濃さのもの或は少しく濃い色合に色上することの手續は總論の場合に於て申し上げました通り、總ての色上げ中で最も難作のないもので、家庭に於ても容易に出來るものであります。今其の手續の順序を申しますれば次の通りであります。

一、濕潤洗滌法に依りて全體の洗濯を行ふ。

二、乾燥洗濯法に依りて尙汚れて居るところの部分洗濯を行ふ。

三、汚點抜き法に依りて汚點抜きを行ふ。

四、簡易染色の編に於て述べました染法によりて染色を行ふ。

この四つの仕事を順々に行ひますれば原色と同じ色で其の色合の濃いものでも又同じ濃さの色合でも、完全に色上げすることが出來るものです。次に其の實例を申し上げませう。

第一項　絹地代用花色裏地の色上げ法

絹地代用瓦斯金巾地花色裏地の色の剝げたものを前と同じ色に色上げせんと欲せば前に述べました四つの仕事を順々に行つてよろしい。其の四つの仕事の中にて、全體の洗濯法、部分洗濯法、及び汚點拔法に關する三つの仕事に就ては、前編に於て述べました通りのことを行へばよろしい。第四の仕事即ち染色のことも亦簡易染色法の編に於て述べましたことを應用すればよろしいのであるけれども、此の花色裏地の色上げをするときは、特に是迄御話し申さなかつたことを、なされた方がよろしいから、この染色に就いてのみ申し上げませう。

此の染色法には色々ありますけれども、貴女方の手で容易に出來るもので、しかも比較的よい結果を得らるゝものは「ベンゾ、コッパー、ブルー」と稱する直接木綿染料を用ひ、次の通りにして染めらるゝ方が一番よろしい樣に思はれます。即ち染風呂に適量の水を盛り、此の中に其の裏地百匁に對し

「ベンゾ、コッパー、ブルー」	三匁
洗曹達	四匁
硫酸曹達	二十匁

の割合に、洗曹達、染料の溶液、及硫酸曹達、を入れて染液を作るのです。尤も染料の分量は、色上げせんとする裏地の色合に依つて多少加減しなければなりません。斯樣にして作りました染液の中に前の洗濯及び汚點拔きを行ふて奇麗に致しました裏地を浸し、一時間煮染を行ひ十分水洗を行へばよろしい。併しながら斯樣にして色上げをした裏地は、日を經るに從ひ漸々褪色する恐あるのみでなく、又洗濯すれば可なり色が落ち易いものであります。そこでこれ等の患を除く爲めに、以上の如くして染めましたものを、更に次の通りにするとよろしい。

先づ別器に適量の水を盛り、此の中に其の裏地百匁に對して

重「クローム」酸加里	一匁

硫酸銅　一匁
醋　酸　二匁

の割合に此の三つの藥品を溶かして一種の色止液を作るのです。尤も醋酸は精確に其の分量を計らずとも、先づ重「クローム」酸加里と硫酸銅のみを少量の湯に溶かします。さうすると液は少しく濁りを帶びて居りますから其の溶液の十分清澄になる迄醋酸を注加すればよろしい。斯樣にして作りました色止め液を熱して攝氏七八十度の熱液となしまして、其中に前の「ベンゾ、コッパー、ブルー」にて色上げをなしました裏地を入れ二十分間位繰り返し、最後に出來得る丈けしつかり水洗するのです。

以上の樣に致しますれば、所謂洗つて剝げず手足につかずと云ふ樣に、なか〳〵丈夫な花色に色上げすることが出來るものであります。此染法は、唯色上げの場合に應用せらるゝにとゞまらず、又新しく染むる場合にも其儘應用することが出來ます。唯新に染むる場合は染料を五匁用ふればよろしい。

以上は花色裏地の色上ですが紺色の裏地を色上するには前述「ベンゾ、コッパー、ブルー」三匁の代りに「オキザミン、ブルー」三R五匁を用ひ前の通りの染色をすればよろしい。括色裏地の場合は「チカゴ、ブルー」六Bと稱する染料二匁を用ひ花色裏地の色上と同じやり方をすればよろしい。

それから貴女方がやらるゝもので、極めて必要なものは海老茶色袴地の色上です。そこで次に其色上法を申し上げませう。

第二項　海老茶色袴地の色上げ法

海老茶色の袴地を同じ海老茶色に色上げするには先づ前に述べました通り洗濯と汚點拔きとをなし、それから染色するのです。尤も其の袴が、總て木綿纖維からのみ出來て居るときと、又毛の纖維からのみ出來て居るときと或は、交織物で出來て居る場合とに依つて、其の染法が多少異なるものであります。そこで別々にこれを述べませう。

木綿織物の場合。此の場合は直接木綿染料を適宜配合して染むればよろしい

即ち其の染液は袴地百匁に對して、

赤色染料　適宜

紫色染料	適宜
炭酸曹達	四匁
硫酸曹達	二十匁

の割合に作つて、此中で一時間煮染すればよろしい。尤も海老茶色と申しましたところで色々ありますから、最初は其の染風呂の中に赤色染料と炭酸曹達及硫酸曹達のみを加へて染色し、中頃から紫色染料の溶液を少許宛其の染液中に加へて染色すれば、其の紫色染料の分量に依りて、色々の海老茶色を染むることが出來ます。

此の赤色染料の中で適當したものは「ベンゾ、ローヂユリン、レッド」又はベンゾ、アストレッド」等でありまして紫色染料としては「ベンゾ、ファスト、バイヲレット」などが適當して居ります。又單一の染料で色上げする場合は「コンゴー、コリンス」と稱する海老茶色の直接染料がよろしい。

毛織物の場合。此の場合は酸性染料を適宜配合して染色すればよろしい。染風呂に水を盛り、此の中に其袴地百匁に對して

硫酸　二匁

許の割合に入れ、それから豫め少量の湯を以て溶かしました「ファスト、レッド」の溶液と及「アシッド、バイヲレット」4BNの溶液とを少し宛代々入れながら、染色するのです。斯樣にして漸々熱を與へたところで、遂に望みの色合になりましたならば、十分な水洗を行へばよろしい。斯樣にすれば其の用ふる染料の分量に依つて色々の海老茶色が染まります。

綿毛交織物の場合。此の場合は前の二つの場合よりは少し面倒で、二度染色しなければなりません。即ち最初は、先づ、毛には能く染め着くけれども木綿には全く染め付かないところの酸性染料で染め、それから別に木綿には能く染め着くも毛には能く染め着かないところの直接木綿料で染むるのです。其の色上げをなすには最初毛織物の場合の染色に於て述べた如くして染め、一旦十分水洗した上で、別に木綿織物の場合の染色に於て述べました樣にして染むるのであります。尤も直接木綿染料は、沸騰點に於ては可なり毛にも染め着くものでありますからして、此の場合に於て直接木綿染料で染むるときは、攝氏七十度位

な温度にて永く染むる樣になさなければなりません。且つ又其の染液中に加ふるところの炭酸曹達は前の半分即布百匁に對して二匁の割合に用ふればよろしいものであります。又全く使用しなくともよろしい。

其の他尙必要な色上げが澤山ありませうけれども、大抵前に述べましたことを能く呑み込んで應用すれば、出來ますから別に述べません。

第二節　原色と異なりたる色に色上げする手續

原色と異なつた色に色上げするには、二つの異なつた場合があります。即ち次の通りであります。

イ、原色を除去することなく、之を利用して新しき色に色上げする場合。

ロ、原色を除去し、然る後原色と全く異なりたる色に色上げする場合。

この二つの場合に依つて其色上げの手續を異にしなければなりませんから、別々に之を述べませう。

原色を利用して他の色に色上げする場合。これは、例へば海老茶色の袴地を黑味かゝりたる紫色に色上げするときのやうに、其の原色の海老茶色は其儘にし置き、更に之を青色染料で染むる場合を云ふのであります。この場合に於ける色上げの手續は既に第一節に於て述べました原色と同じ色に色上げする手續と全く同一であります。唯其の染色する際は、第一編第九章に於て述べました原色、複色、余色等の理をわきまへて、染料を撰擇しなければなりません丈であります。

原色を利用することの出來ない色に色上げする場合。これは、例へば赤色に染まつて居るものを青色に染め返すと云ふやうな場合で、其の目的を達するには是非共先づ其の原色を拔き去つて仕舞はなければなりません。此の色上げをなすには次の順序に從はなければなりません。

一、濕潤洗滌法によりて全體の洗濯を行ふ。

二、乾燥洗滌法によつて部分の洗濯を行ふ。

三、汚點のある場合は汚點拔き法を行ふ。

四、色拔を行ふ。

五、染色を行ふ。

此の場合の色上げで六ヶ敷のは、第四番目に行ふ色抜きであります。そこで前に述べました色抜法を行ふて其の原色を抜くことが出來るものならば、此の色上げを行つても差支ありませんが、前の色抜法に依つて其の原色を抜くことが出來なかつたならば、此の色上げを行はず專門の色上げ屋に任かす方が得策であります。次に原色と異りたる色に色上げする方法の實例を申し上げませう。

第一項　黑色の色上げ法

家庭に於て色々なものを黑に染め返す必要を認むることが屢々あります。尤も元の地色の如何に依りましては、純黑色に染め返すことが少し六ヶ敷いものであります。たとへば最初赤色に染まつて居るものを黑色に染め返す時分には幾らか赤味が〻つた黑が出來、青色に染まつて居たものを黑色に染め返す時分は少しく青味が表はれて來るやうなものであります。其の黑の色上げ法を申し上げませう。

先づ色上げに對する準備工程をなし、然る後直接染料に屬する黑色染料の「ダイレクト、デーブ、ブラック」Eを用ひ直接染料の染方に依りて染むればよろしい。

然し斯くして染めたものは洗濯に對して丈夫であるといふことは出來ません。そこで極めて丈夫な黑色に色上げするには次の方法によるとよろしい。

丈夫な黑色に色上げするにはどうすれば宜しいかと云へば、最初單寧液の下漬を行ひ、鐵鹽類の溶液にて固着し、最後に鹽基性染料或は植物性染料で染むればよろしい。先づ色上げせんとする木綿は、必要の準備工程をなした後、其の布百匁に對しまして、

單寧酸　を　六　匁

の割合に取つて、之を適量の熱湯に溶かしましたものゝ中に浸し込み、最初は能く繰り返しまして、それから一夜間其儘其の液中に漬けて置くのです。それから次の日になりましたならば、引き上げまして斑のないやうに能く絞り、之を木醋酸鐵と云ふ藥劑を水にて稀釋致しました淡い液に浸して、三十分間許り繰り返せばよろしい。斯樣に致しますれば其の布が殆ど黑い色位に染まるものであります。そこで次には

炭酸石灰　二　匁

の割合を以て混合致しました液を少しく溫めまして、前の殆ど黑くなりました布を入れて、再び三十分間許り繰り返すのです。それから能く水にて洗ふた上で染むるのです。染むるには布百匁に對し

「ジャーナス、ブラック」　四匁乃至六匁

許り用ゐまして、鹽基性染料の染め方を其儘應用すればよろしい。或は又此の「ジャーナス、ブラック」の代りに「ログウードエキス」と申します一種の植物性染料を用ひてもよろしい。此の「ログウードエキス」を用ひまして染むるには先づ布百匁に對して其の染料二十五匁許り取りまして、湯で煮沸し一旦溶かした上で染風呂の中に入れて染液を作るのです。此の染液の中に前の下漬を致しました布を浸し一時間能く煮れば、立派な黑に染まるものであります。それから能く水で洗ひまして、今度は

水　一升

石鹼　二匁

の割合を以て作りました石鹼の溶液を熱しましたものゝ中に、前の染風呂から上げて能く水で洗ひましたところの布を入れ、十五分間許り能く繰り返すのであります。斯樣にして石鹼の溶液で洗ひますれば、黑色が益々奇麗に且つ立派なものになります。次にそれを一旦湯で洗ひまして、それから又能く清水にて洗滌すれば、それで出來上つたのです。

この「ログウード」で染めましたものは、「ジャーナスブラック」で染めましたものよりは、寧ろ其の色が堅牢で洗濯しても、さうは剝げませんし、又日光の爲めには褪色することが、極めて遲いものであります。

以上御話致しました黑色の色上げ法は主に木綿の場合に於てのことで、此の法は絹織物及び毛織物には適して居りません。そこで毛織物を黑色に色上げすることを申し上げませう。子供達の兵兒帶には近頃白モスリンが可なり用ひられて居るやうに見受けますが、此の白「モスリン」は汚れて洗濯致しますると段々白茶色を帶びて來て、未だ地質が弱らぬ間に用いることが出來ないやうになることがまゝあります。斯樣な場合に黑の色上げをなせば、又立派な兵兒帶と

して用ふることが出來ます。此の色上げを最も簡單に致しますには第一編第八章第三節に述べました酸性染料毛染一般の手續により酸性染料に屬する黑の染料を使用すればよろしい。尤も此の黑染の場合は染料と共に用ふる硫酸の代りに醋酸を用ふる方がよろしい。そして適當な染料は「バラチン、ブラック」か或は又「ウールブラック」で其の分量は色上げする品物百匁に付八匁乃至五十匁位使用せねばなりません。絹織物も亦之と同樣にして黑の色上げをすることが出來るものであります。

この染め方は極めて簡單でありますが、唯白きものを黑く染め直すとき又は黑きものを色上げするときのみに應用さるゝのでありまして、友仙の如き模樣のあるもの又縞の洋服を黑く色上げするときなどには適して居りません。此等のものゝ色上げは少しく複雜になりますが、次の樣にすれば最も完全に出來上ります。

色の剝げた「モスリン」友仙でも又流行後れの縞の洋服でも其の色上げをなすべき品物の目方百匁に對し

重「クローム」酸加里　三匁
硫酸　一匁

を取り之を適量の湯を盛つた釜の中に入れ其の中で四十分間位能く煮まして、後十分に水洗したる上

「ログウドエキス」　十匁乃至十五匁
「ゲレッブエキス」　一匁乃至二匁

を適量の熱湯に能く溶かしました染液中に浸し込み四十分間煮れば、良い黑に染ります。尤も其の煮て居る間は品物を時々繰り返さなければなりません。

次に染液から取り上げ、十分水洗した上で乾かすのであります。又時としては其の染め上げたものを更に適量の水に品物百匁に對し三匁の綠礬を溶かした冷液又は二分の一匁の重「クローム」酸加里を溶かした溫液中に浸し再び水洗することもありますがかうすれば其の色が一層丈夫になつて來ます。斯くの如くして染むれば手數は少し多くかゝりますが黑色としてはなか〳〵堅牢で立派なものが出來ます。

普通の色上げ法は大略前述のやうなものでありますが、之から引張法に依る色上げ法に就て少しく御話し致しませう。

色上げと云ふのは一旦使用したものを染め直すものであるが、衣服の襟の部分又は袖口の如き物に觸れ易き部分は其の他の部分と一樣に染り兼ぬるものであります。尤も適當なる其の準備工程を行へば大抵此の困難は補ひ得られますが、時としては又品物によりましては、それが爲に生ずる染斑をどうしても防ぎ得られぬことがあるものです。たとへば繻子の帶などは身體にまかれて內側にかくれるところと結目などの外側に出て居つてしば〳〵物に觸れます部分とは、古くなるに從ひ其の地質に大なる相違を來して來るものであつて、之はどうしても地質を一樣にすることが出來ません、從て全く斑のない色上げをなすことは非常に困難なやうなものであります。斯樣な場合は前に述べました色上げ法によるよりも引染法に依つてなされた方がよろしいものであります。それは色上げせんとする織物を桁に張りまして(此の桁に張るやり方は仕上法の糊張を御話するときに詳しく申し上げます)、之に豫め湯で溶解した染料の溶液を刷毛に含ませて引き、以て染め上ぐるのであります。

浸染法に依りますと染液は常に上下左右に動いて居りますから、染料は吸收力の強い部分にはいくらでも吸收せられて、其の部分が濃く染まりますが、引染法に依ると刷毛が與へた染料は其の部分に止まり、他の部分に移動し行くことが出來ませんから、已むを得ず其の所に止まります、たとへ吸收力に富んで居る部分でも供給せられた染料以外に吸收することが出來ます、又吸收力に乏しき部分も與へられた染料は之を他の部分に放出する手段がない。そこで引くときさへ斑なく一樣に引けば、一樣に染色せらるゝものであります。

併しながら此の引染法は家庭に於て稍困難なことがあります。それは、高き熱と濕氣を與へなければ染め着かぬ染料を引染に用ひるときは、其の染液を引いて乾かした上で蒸箱のやうなものに入れて蒸さねばなりませんが、その蒸すといふことが出來難いことゝ思ふのです。織物の種類に依つても亦これと同樣の場合があります。たとへば毛の織物などに引染をすれば最後に蒸さなけれ

ばどうしても能く染め着かぬものである。又たとへ木綿のときでも絹の場合でも濃い色を引染するときは矢張一旦蒸さねば完全なる染色は出來ません。斯く申し上げますと引染法に依る色上げは家庭に於ては出來ないものゝやうであるが、そうでもありません。前に申しました縞物の目引などは立派におやりになることが出來ます。又羽二重、縮緬などの黒紋附とか淡色紋附などは皆引染法に依るのです　次に一例として群青色絹織物の色上げを御話申しませう前述の通り桁に張りて引つ張り引染の裝置を致しまして、酸性染料に屬する「ウール、ブルー」S又はRを適宜の湯にて溶解し之を刷毛に含ませて布の表面より引けき、次に裏面より引き、一旦乾かすのです。そして濃淡の加減を見て、若し淡れば尚一回表裏兩面より引きて乾かせばよろしい。斯樣にして適當の色を得たならば

明　礬　三　匁
水　一　升

の割合で作つた明礬の溶液を表裏兩面に引き、一旦乾かして、刷毛にて清水を引きて洗ふか、若しくは桁より取り離して水洗するか、何れにても便宜の方に從つて水洗して乾かすのであります。尤もこれは晴天の日を撰みてなさらなければなりません。斯樣に致しますると引きました染料は太陽の熱を得て多少染着し又幾分は機械的に纖維に附着致します。次に明礬を引くと機械的に附着し居る染料も遂に纖維に固着して染色せらるゝのです。次に尚一例として紺色と白との辨慶縞になつて居る縞織物の色上即ち目引の方法を申し上げませう。引染の裝置は前と同樣に致しまして、直接染料に屬する「チカゴ、ブルー」四B と稱する染料を適當の湯に溶解したものを前同樣に引き、望みの色を得た上で、前と同樣な明礬の液を引きまして、一旦乾かして洗へばよろしい。斯くすれば白の部分は水色となり、紺の部分は色上げが出來まして奇麗になります。其結果遂に水色と紺色とより成る立派な辨慶縞の織物になります。

第六編　仕上法

色上を行ひたるものとか、又は簡易染色を以て新らしく染めたものは、其儘にては實際用途の上に充分とは申されません。取り分け布に於きましては一層仕上は大切なることです。仕上の方が充分適宜に出來なければ、よしや奇麗に出來た染色も、さまで立派に見えないものであります。尤も此の仕上法は織物の種類により又用途によりまして皆夫れ々々別々に致さなければなりませぬ。そこで仕上は、項目を分けて研究すべき仕事になるのです。從つて仕上の方法は色々ありますから、順を追ふて御話いたします。

第一章　白物の仕上

先づ第一に白いものゝ仕上は、如何にすれば宜しいかと云ふことを申しませう。例へば、白き「ハンカチーフ」を洗濯した後の仕上、或は白い襦袢を洗濯した時の仕上方でございます。是は先づ最初には白染を行ふのです。尤も白染と云つて

白い染粉で染めると云ふ譯ではありませんが、唯彼の原色餘色の理を應用して白く見せる法であります。今若し白いものが、極めて僅かに黄味を帶びて居る時には、大變汚なく見ゆるものですが、其の場合は紫色で染むれば白く見ゆるのであります。是れは黄の餘色が紫であるからでございます。今之を少しく細かに申しますれば、恰も太陽の光線が白く見ゆるが如くで三原色が合するから白く見ゆるのでありまして、決して黄色なるものが除かれて夫で白く見ゆるのではありません。黄色の上に紫色なる青と赤との二色が加はり丁度三原色が合して人の目に白くうつるのです。ところが白き布や糸はどうしても純白ではなくて、大抵の場合に幾らか黄味を帶びて居るものであります。殊に何回となく用ひたものは餘程黄味掛つて來るものです。それは洗濯する度毎に黄味掛つて來るのである故であります。其の場合には前の理により何時でも紫で極めて淡く染めると宜しい。或は又赤味を帶びて居るときは、赤色の餘色の綠を掛くれば白く見せることになります。斯樣な風に布が持つて居る色の餘色を表はすところの染粉を用ひまして染めますれば宜しい。所が之は極く淡く

殆んど肉眼で見分け得られぬ位に淡く染めなければなりません。濃い場合には、白く見せる爲めに染めた色が現はれて却て汚なく見ゆるものであります。洗濯屋に賴んで出來上つた白い洗濯にも、大部青味の見ゆるものがあります。ところが白いものが少しく青味を帶びて居るときは人々には一層白く感じますから、青い染粉にて白染を行ふときは少し位分量を過しましても宜しいものですが、青より外の色を白染に用ふる時には、決して分量を過ごしてはなりません。それ故白染は全く一つの手際仕事であります。そこで此に使ふ染粉はどんなものが宜しいと云へば、木綿物といはず絹物といはず毛といはず何の纖維から作られた者でも通じて鹽基性に屬する染粉が適當です。尤も鹽基性染料は木綿には濃く染らぬものなれど、白染位には用ひられますし、絹及毛には勿論染まるものであるから、此染料を使ふが便利であります。ところで此の白染は一寸の化粧でありますから、色が弱くても構いません。普通宜しいとして使用するのは、黃味の白染に用ふる紫の染粉には「メチル、バイヲレット」を用ひ、赤色のあるものに用ゐる緣は「マラカイト、グリーン」、茶味のあるものは、白染として「ヒンメルブルー」と云ふ染粉を用ひます。此等の染料を先づ普通の取扱に依て溫湯で溶かし、尙澤山の水に極めて淡くうすめ殆んど見分けられぬ位淡い染液に、今白染を行はんとする布を入れて手早く繰り返すのです。斯樣にして極めて淡い液で何回も染むると、元の色は見えぬ樣になつて白くなるのです。そこで白くなれば、洗はずして其儘で直ぐ樣乾かせばよろしい。さうすれば白染の仕上が出來るものであります。

第貳章　糊張仕上

第一節　仕上用の糊

それから次には糊張のことです。糊張と申しても糊を用ひますときもあり、唯水丈けで張る時もあります。後の場合の樣に水丈けを用ふるものは水張と普通申します。若し糊張をするといたしましても、其の目的に向つて用ひらるゝ糊料の中に澤山の種類があります。織物の、種類性質、用途の異なるに從ひまして一樣の糊料を用ひることは、できないものでありますが商賣屋ならばともか

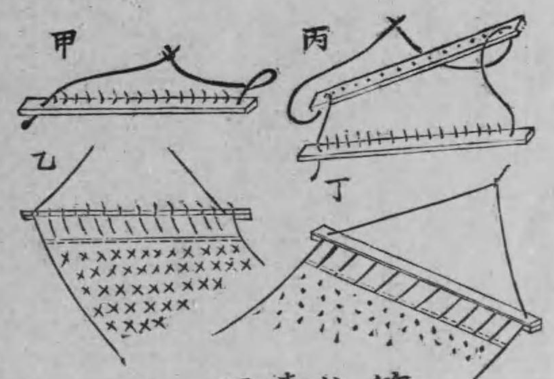
くも家庭に於て、左樣に六ヶ敷いことは到底行かぬものであるから、一般絹にも木綿にも通じて一番使用に適ふものを取るのが得策です。此の適當なるものは布苔です。何故に布苔が宜しいと云へば布苔は第一永く日を經ましても腐ると云ふことがない、小麥や米糊のやふに酸醗すると云ふことがありません。糊によりましては、布の上にて酸醗して甚だしく地質を痛めることがあります。夫れのみならず、それが爲めに染色までも害することが能くあることです。餘り繁昌せぬ呉服屋などには赤の綿ネルなどに黑い星の出來た品物がある。是は仕上に附けた糊の酸醗して、それが爲めに糊が酸氣を帶ひ、其の酸氣が布の染め色に作用して黑星が出來たのでございます。これが爲め地質も可なり痛めらるゝのです。斯ふ云ふ風ですから此等の心配の少ない布苔を使ふた方が安全です。其の外布苔の特點と云ふのは他の糊料よりも布の光澤を失ふ患が少ないのと、又染色を白けさせないのであります。斯樣なる點からして布苔が一番宜しい。さうして布苔の溶き方は、大抵煮て溶かしますが、煮たならば急ぎの場合に間に合ひますけれども少しく氣長くして、使ふ可き前日から豫め用意して、明日用ふるならば今日から水に漬けて置いて次の日に能く攪き回わして、之を一旦目の粗き布片で濾しそれに適度に水を入れ、程良き加減にして用ひるのがよろしい。斯ふ云ふ風にやれば布苔が經濟なのみならず餘程手際良く仕上が出來るものです。

第二節　糊張の手續

次に糊張を實際に行ふべき方法ですが、是は二樣に行はれて居ります。尤も此等の法は西洋などで行ふ大仕掛の仕上は別物として、日本で從來行はれて居るもので家庭に應用し得らるゝものであります。此二法とはとりもなをさず板に張るのと、又、桁張りにすることであります。良き仕上は板張では出來ません。板張の方法などは此に云はずとも貴女方は充分御承知でもありませうから、別に申しません。桁張と云ふのは布の兩端を桁と申すもので張り伸ばすものです。桁は第拾壹圖の樣のものであります。

序であるから其の桁の構造を申します。圖中甲は長さ一尺五寸に巾八分厚さ五分程の木に、一寸置き位距てまして釘を打ちましたもので、其の釘の尖の方を

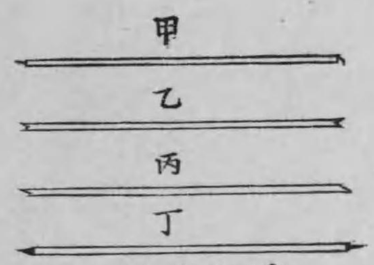
圖の如く曲げまして、其の兩端には穴をうがち、紐を通して作つたものです。此れに布を張りますれば圖中乙の如くなるのです。又丙圖の構造は甲と同樣な木を取り、之を二本を以て一組となすのです、一本の方には一寸置き位に釘を打ちまして他の一本には別に釘を打たずして唯一寸置きに釘の這入る位の穴を穿ちまして、前の釘を打ちましたものと合しますれば丁度其の釘が穴に這入る樣に作つたのです。それを圖の樣に紐にて繋ぐのです。之に布を張りましたときには丁圖の如くなるのです。そこで其の桁にて引張りました布には一寸か又は丁寧にやれば五分位を隔てゝ伸子と云ふものを張ります。之は布の巾を引延ばすのです。其の手續きを申しますと、最初着物



第拾壹圖

ならば解きたる片々のものを繋ぎ合せて反物の形といたしますのであります。尤も其の兩端の桁に繋がる所へは少々別の布を縫い付け、其所を張桁の釘に差し通す樣になされた方が宜しい。さうして桁にて兩方へ張りまして、之に伸子を最初五寸か一尺置きに表の兩耳に挿して張るのです。それから刷毛にて一旦糊を引いた上で次に極く細かく五分か一寸隔てに尙伸子を張りまして、今一度糊の附かぬ刷毛にて撫でるのです。この糊の付かぬ刷毛にて撫でるのは前に付けた糊に不同のなき樣にする爲めであります。それから之を乾かすのです。尤も糊は充分乾かない鳥渡半乾きと云ふとき、伸子を凡て取り去り、耳の方の凸凹を直して置かなければなりません。此の伸子を取り除ける時は大切です。餘り早きに過ぐる時は折角巾を引出したものも何の役にも立たぬ事となり、遲きときは耳の凸凹が消えなくなつて甚しく縫ゐにくゝ、品物により着物にならぬ樣なことが出來るものであります。伸子の跡かたの消えぬ樣になつた時には、其所に霧水を吹き掛け濕氣を與へて手にて引延ばして直せば、手數ではあるが直すことが出來ます。

序に伸子のことも一寸申して置きませう。伸子は第十二圖に示した樣な風に色々あります。先づ普通は四種ですが一々此の構造を申しますれば第一に圖中甲の如く竹の細き棒の兩端に少さき金屬製、主に眞鍮の針のあるもので、第二に乙の如き竹の棒の尖は圖に示す如く鋏形に作られたもの、第三には圖中の丙の如く竹の棒を削りたるのみにて尖の所は兩端が丁度反對に削られて居るのです。第四に丁の如く兩端の細く尖りたる尖端に針を挿し其の部分を紙にて卷き澁を施したるものであります。此四種の中では第四即ち丁の如きものが最も都合が宜しいのです。丙の如きも可なり宜しいですが甲乙は餘り宜しくない樣であります。甲の如きは其の構造の上にても大方は不便が想像致されます、何故かと申しますれば、竹は可なりの太さを有つたもので其の部分へ細き針を挿したものであるから竹の緣にて布を突きまして格段の皺が生ずるものであるからで



第拾貳圖

す。夫れで實際用ひて時々思ひも掛けぬ不便を感ずることがあります。以上の如く伸子の種類を分けますには其の構造によりて分つこともあるが、尙其の用途の上から分つこともあります。即ち木綿に用ひまする木綿用の伸子と、絹に用ひまする絹の伸子、或は又普通の並巾物に用ひますものと、大巾即ち二巾物に用ひますものとあります。それで大巾と並巾は唯其の長さに依て分けられたのでありまして、木綿用絹用は其の張力の强きものと弱きものゝ違ひであります。木綿用のものは絹物用のものよりは餘程張力を强くしたもので其の太さも太いものでございます。貴女方は伸子を求める時には、是非此の區別を覺えて居なければなりません。それから若し貴女方が新に伸子を求めたときには、それを早速使用せずして先づ油燒と云ふことをなさる方が宜しい。油燒きと云ふことをいたさねば伸子が甚だ損じ易いものであります。油燒をするのは油を沸騰させて置きまして、其の中に伸子の兩端の所を一寸斗り浸し、餘程色付きまして殆んど飴色と云ふ位まで燒くのであります。

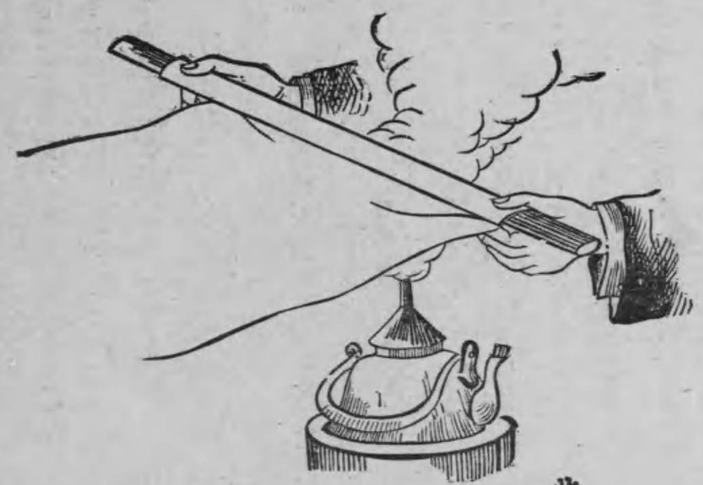
言ふことが少し横道へ這入りましたがさて糊張と云ふものは前申す樣な工合

に糊を引いてそれを乾せば宜しいが、伸子を張るときに今一つ注意すべきことは、なるべく糸目を眞直に張ることです、糸目が曲りますと自然布が曲りますからして殊に注意して置きます。

糊張したものも、其布により又用途によりましては、布の面に起つて居る毛端を充分に落ち付けなければなりません。普通ならば糊張丈にて毛端は落付きますが、充分に落ち付かなければ光澤も出ませんし又布が粗く見ゆるものであります。これは主に木綿に屬したことでございますが、此等は糊張を行ひました後打盤の上に載せて木の槌で打ちますれば宜しい。打ちますれば毛端は皆倒れまして布の面が平になつて光澤も出ます。斯樣に打盤を用ひるのも、仕上の上の一つの大切なる手段であります。尤も光澤といふても底からの光澤でなく上艶でありますから、此の上艶を好まぬ場合は打盤の仕上をした上、更にざつと水張をするとよろしい。さうすると底からの光澤が表はれて來ます。これを仕上の方では艶消しと申して居ります併しながら絹とか毛の織物には打盤の仕上は行つてはなりません。此等のことは貴女方も既に御承知のことゝ思ひますが注意までに申して置きます。又絹毛の外木綿の織物にいたしましても、格段の組織が出來て其が爲めに其の織物の品位を顯はして居るものは、打盤の仕上は行はない方が宜しいのであります。

第參章　湯伸仕上

此の湯伸仕上は、木綿の織物には左程必要でなく從つて効力も亦著しく見えません。唯此の仕上は絹織物が主で、毛織物にも時々必要がある丈であります。例へば縮緬織物などは、洗濯いたしますと非常に縮みますから是非之を引延ばさなければなりません。之は糊張り又は水張りをすれば宜しいやうですが、糊張丈では巾は伸びるといたしても、手ざはりと云ひ光澤といひ何れも良くなりません。ところで湯伸と云ふ一つの仕上を行へば、巾を延すことを得らるゝと同時に、手觸り及び光澤を十分に回復することが出來ます。其のやり方はと云へば之には立派な機械があるものですが併し家庭などにて少しのものをやるに一々機械に掛ける程の事もありませんから、簡單に鳥渡の間に合せにする爲め



第十三図

に他のもので代用する方が宜しい。先づ土瓶に湯をたぎらかして、下から非常に熱して湯氣を起たせます。此の時土瓶の一方の横の口を確かり閉ぢ上の大きな口には之に適ふ位の漏斗を置きまして漏斗の細き口に湯氣を集めて吹き出させます。そこで此の勢よく吹き出づる湯氣に布を觸れしめますこと第拾參圖に示した樣にするのです。此の湯氣に掛けるには先づ棒の樣な丸い物を取り、之に豫め巾を要する丈の印を付け一定の巾を定めまして、湯伸を掛ける所の品物を其棒と共に

持ちまして、棒の印にまで布の巾を引き延ばしつゝ湯氣に觸れしめつゝ左右に張るのであります。

又一つは湯伸を掛ける布の兩端を縫ひ合して其間に二本の棒を入れまして、之を二人にて反對の方向に引張り、さうして靜に湯氣に當て、表裏各に數回つゝやれば可なり能く出來るのです。之にては縱に斗り伸び横巾は伸びませんから巾を伸すには前の方を取ります外ないのです。

第四章　火熨斗の仕上

次には火熨斗にて仕上をすることを申します。之は貴女方も御存じの通り多く織物の皺を伸ばすときに掛けますものでございます。併し其の場合のみに限りません。織物の面を極めて平にすることが必要の場合にも湯伸の後に又火熨斗を掛けることが間々あるものです。殊に羽二重とか甲斐絹とかいふ平かな織物を、洗濯或は色上或は染色したる後に、其の面を極めて平にする爲めに火熨斗を掛けることが極めて必要であります。大仕掛にやる時に「カレンダー」

に掛けて仕上致しまするが、夫れは丁度小仕掛の時の火熨斗であります。而して火熨斗のかけ方に就ては貴女方は多く經驗もあり、又注意も覺えて御出でせうから、細かくは申しません。唯私の方から注意致しますことは、矢鱈に火熨斗を掛けるとそれが爲に色を變らせる恐があると云ふことです。其ことは是非覺えて居て貰ひたいのです。例へば貴女方が用ひらるゝ海老茶袴を染めやうとする時は吾々は最初試驗的に染めて得たる小さきものに火熨斗を掛けて其火熨斗の爲めに色が變るか變らないかを試驗いたします。又仙台平のやうに之を仕立つる際に火熨斗を掛ける必要のある織物の糸を染むる場合にも亦必ず之と同じ試驗をやつて居ります。この樣に火熨斗を掛けようとするときは先づ其物に小部分に掛けて試驗して見るとよろしい、そして此の火熨斗は餘り熱した者を、一回二回にやるよりは熱し方の少し足りない位のものを數回掛けた方が宜しい。さうして又一回火熨斗を掛けた後續け樣に第二回を掛けないで、一旦冷やして後で次回と云ふ風に、一回毎に風に當てゝ冷やして貰ひたいものです。斯樣にすれば火熨斗の爲に色の變ると云ふ事は極めて少ないものであります。

今一つ注意することは火熨斗を掛けた爲めに色が白ッパケて見ゆることがあるから斯くならないやうにすることです。何故に火熨斗を掛くればさうなりやすいかと云ふに、其の面が非常に滑かなるが爲めに光線を一層能く反射することになるからであります。所謂其の部分は摩擦して、天然の光澤を表はすのでなくして人造的の一つの光澤が出て來るのです。其爲めに却て色が薄く見えて白ッパケて見ゆるのです。之も布面一樣になれば宜しいが普通火熨斗機械の構造からしても其の注文は無理なことで或局部のみが著しくなるのは當然です。そこで或る特別の場合は別のことゝして普通のときは木綿でも絹でも毛でも直ぐに火熨斗を其布に接することなく「キャラコ」のやうな織物を間に置いて直接火熨斗器の摩擦を防ぎ此等の患なきやうに掛けて貰いたいものであります。さうすれば、之が爲め色が白ッパケて見ゆるると云ふ患がないのみならず火熨斗に弱い色でも變色の患が少ないものです。これは是非共注意して貰はねばなりません。火熨斗の掛方は此位にして置きます。

それから仕上の方法に就いて申しますと色々あります。袴の仕上とか着物の

仕上とか又帶に用ゆる繻子の仕上とか朱珍などの洗濯をした後の仕上とかと云ふやうに皆其の織物々々に依て多少其仕上に違ひがありますが、一々それを述ぶるも却て煩はしいから申しません。

此迄申したのは一般の仕上法であるが、是等一般の仕上に付ての方法とそれをなすに使用すべき道具の使ひ方との注意を頭に持つて居つて、他の仕上を行ふも別に大きな間違ひがないから其の積りでやつて頂きたいものであります。

増訂改版 **衣類整理法** 終

大正二年七月一日印刷
大正二年七月四日發行

著作者　石川弘藏
東京市神田區三河町一丁目十九番地
發行者　瀨木博尚
東京市神田區西小川二丁目七番地
印刷者　高木唯次
東京市神田區小川町七丁目七番地
印刷所　大進社

定價金壹圓

著作權所有

發行所　東京市神田區三河町一ノ一九
電話本局一四四番
振替東京三八一五番
博報堂

45
450

終